

# VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2026

7

July

特集

どう進める？

## 高校の特色化・魅力化

——生徒を主語にした学校づくりに向けて

北海道  
表紙の学校  
静内農業高校  
しずない



### 今号の掲載校

岩手県立水沢高校 / 長崎県立佐世保南高校 / 熊本県・熊本市立必由館高校 /  
大阪府・私立大阪高校 / 岩手県立葛巻高校 / 富山県立高岡高校 /  
静岡県・私立静岡高校 / 静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校 /  
長崎県立大村高校 / 大阪府立箕面東高校 / 福岡県・福岡市立福翔高校

# 先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「東大を目指さない？」  
安易に提案した担任の私に、  
生徒が返した想定外の質問

岩手県立水沢高校  
佐藤 紘大

さとう・こうだい ● 同校に赴任して4年目。数学科。  
生徒の主体的・自律的な学びの実現を目指し、  
授業改善に力を入れる。2026年度からは、  
DXハイスクール採択校である同校の様々な教育活動の  
評価・改善・精選を担うDX委員会の委員長を務める。



ある日の放課後、2年生のクラス担任だった私は、11月に実施された模擬試験の結果について女子生徒Aさんと面談をしました。Aさんの成績は、5教科すべてが高得点で、志望校である難関国立大学には余力を持って合格できそうでした。10余年の教職歴の中で私が出会った生徒の中でも屈指の学力を持つAさんは、より難関の大学を目標にすれば、さらに学力が伸びるはずだと私は確信していました。

いつもの穏やかな笑顔で面談にやってきたAさんに、私は「模擬試験の結果、見た？」と聞きました。Aさんは「はい。よかったですよね」とさらりと答えました。その言葉にうなずきながら私はこう提案しました。「こんなに高い点数が取れるのだから、東大を目指さない？」。するとAさんは「そう言ってもらえるのは、うれしいです」と笑顔を崩さずに答えた後、私に尋ねました。「でも、東大に行ったら、私の人生の何が変わるんでしょうか？」。想定外の質問に私は思わず、「えっ？」と声を出してしまいました。私が予想していたAさんの反応は、「自信がありません」とか、「頑張ってみます」といったものだったからです。次の言葉がなかなか出てこなかった私は、「人生の何が変わるのかってどういうこと？」とAさんの質問に質問で返しました。

「東大も素敵な大学だと思いますが、東大に行ったら私の人生がどう変わるのかが分からないんです。今の志望校が唯一の選択肢ではないことは分かっていますが、現時点で私が一番関心のある大学なんです」。穏やかな表情を変えずに語るAさんに、私は「人生はどうか分からないから、卒業後の選択肢が増えそうな東大に行った方がいいんじゃないの？」と言いましたが、内心は「中身の無いことを言っているな……」と情けなさでいっぱいでした。私は東京大学のことを詳しく調べていたわけではありませんでした。それなのに「東大を目指さない？」と安易に口にしたのは、自分のクラスに学力が高い生徒がいることに浮かれていたからだとして自己嫌悪に陥りました。

面談は、生徒が気づきを得たり、前向きな気持ちになったりするための時間だと考えていました。しかし、私との面談がきっかけでその後、Aさんにそうした変化が生まれたとは思えませんでした。Aさんは当初の志望校に合格しましたが、私にとってはAさんとのあの面談は思い出すと苦しくなる、しかし決して忘れてはならない面談だと思っています。

担任として生徒の進路選択にどうかかわっていこうとしているのか、そして地方の高校に通う生徒の進路観の醸成をどのように支援しようと考えているのかを佐藤先生が語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article36719/>

巻頭

先生なら、どうしますか？

「東大を目指さない？」

安易に提案した担任の私に、生徒が返した想定外の質問

岩手県立水沢高校 佐藤 紘大<sup>こうだい</sup>

2

特集

# どう進める？ 高校の特色化・魅力化 ——生徒を主語にした学校づくりに向けて

- 4 課題整理 全国普通科高等学校長会 事務局長 佐藤 到<sup>いたる</sup> × 長崎県立佐世保南高校 校長 舟越 裕<sup>ひろし</sup>
- 8 事例 1 市部・公立 熊本県・熊本市立必由館高校<sup>ひつゆうかん</sup>
- 11 事例 2 市部・私立 大阪府・私立大阪高校
- 14 事例 3 郡部・公立 岩手県立葛巻高校<sup>くずまき</sup>

18

指導変革の軌跡

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

富山県立高岡高校

進路指導改革

22

シリーズ 高×大・専・社接続の視点で考える

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

キーワード 産学連携

学校事例 静岡県・私立静岡清高校<sup>せいせい</sup>

26

ウェブ連載記事 ダイジェスト

「主体的・対話的で深い学び」を  
実装する授業デザイン

New

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

英語

静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校 田中大成<sup>たいせい</sup>

数学

長崎県立大村高校 川久保晃一

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

大阪府立箕面東高校<sup>みの お</sup>

福岡県・福岡市立福翔高校

そうだったのか！ 教育課程

New

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36

Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINE でもご覧いただけます。

印刷製本／株式会社協同プレス 編集協力／有限会社ペンダコ 撮影協力／加藤 武、ヤマダ  
ディッキ イラスト協力／カモ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。©Benesse Corporation 2026

どう進める？

# 高校の特色化・魅力化

生徒を主語にした学校づくりに向けて

高校教育を取り巻く環境が大きく変化する中、各校には特色化・魅力化が求められています。その転機となったのが、2020年11月に公表された「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）」です。同まとめでは「各高等学校の特色化・魅力化に向けた方策」が高校教育改革の柱の1つとして位置づけられました。そしてそれは、その後に出された中央教育審議会答申（\*）などにも引き継がれ、26年2月に公表された「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた『N-E.X.T.（ネクスト）ハイスクール構想』～」においても、高校教育改革を進める上で重視する視点の中で「各高校の特色化・魅力化」が打ち出されています（図1）。

同構想では、先導的な学びのあり方の構築を改革先導拠点校が担うこととなりますが、その取り組みや成果を協力校や域内の高校に広く共有・普及することにより、地域全体の高校教育の質の向上が期待されます。すなわち、同構想は多くの高校が自校の特色を明確化し、その魅力を高めていく改革とも言えるのではないのでしょうか。

各校が特色化・魅力化を進めていく上で忘れてはいけないのは、それらを「生徒を主語にした」ものにするという視点です。では、そうした視点を踏まえた特色化・魅力化はどのように進めていけばよいのか—本特集では、実践者の話や事例を通じて、その問いのヒントを探りました。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

## P.4 課題整理

自校の「特色」を明確化し、生徒が感じる「魅力」を高める

全国普通科高等学校長会 事務局長 佐藤 到<sup>いたる</sup>

長崎県立佐世保南高校 校長 舟越 裕<sup>ひろし</sup>

## P.8 事例1 市部・公立

学校設定教科を学びの土台とし、  
時代に対応する文理融合型の新しい普通科を創る

熊本県・熊本市立必由館高校<sup>ひつゆかん</sup>

## P.11 事例2 市部・私立

暗黙知として受け継がれてきた全人教育の文化を言語化。  
教師と生徒の共通の指針に

大阪府・私立大阪高校

## P.14 事例3 郡部・公立

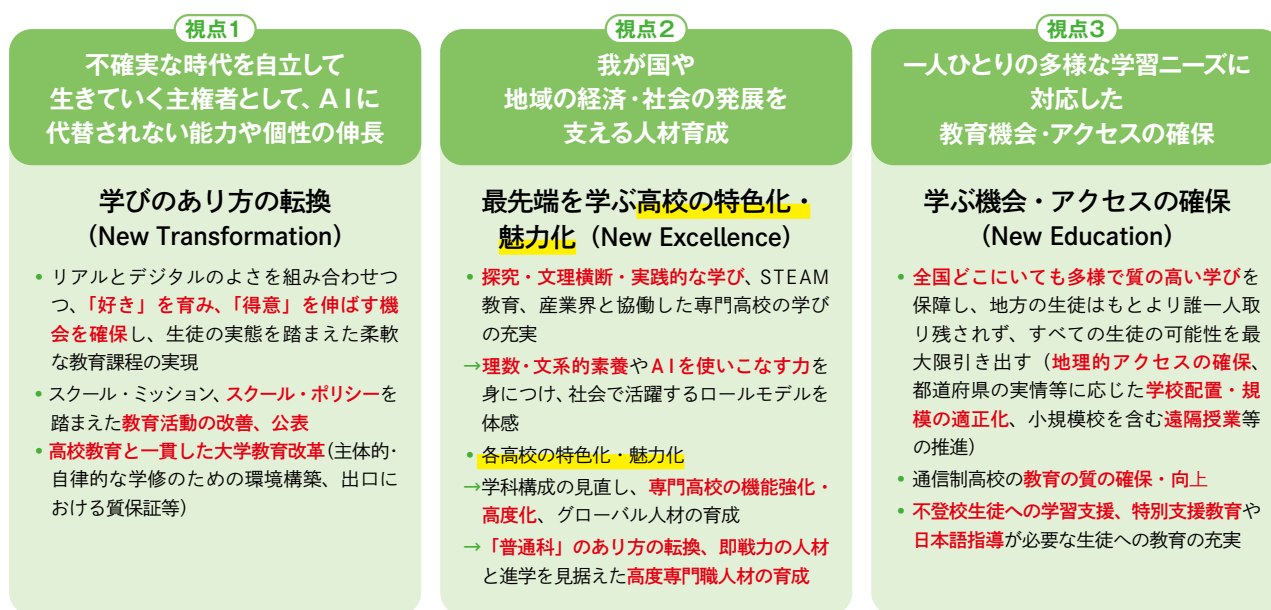
地域資源・課題をテーマとするプロセス重視の探究学習を、  
町役場と連携して進める

岩手県立葛巻高校<sup>くづまき</sup>

\*『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2021年1月）。



図1 高校改革の方向性 ～2040年に向けた高校の姿～

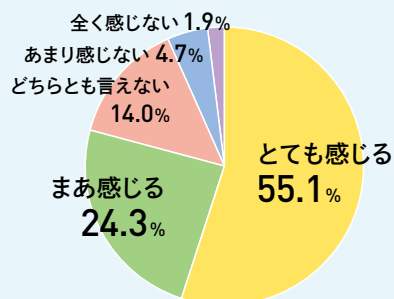


3つの視点を重視しながら、さらなる高校改革を進め、N-E.X.T. ハイスクール構想を実現する。高校から大学・大学院に至るまでの一貫した改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材を育成する。

※文部科学省「高校教育改革に関する基本方針(グランドデザイン) ～2040年に向けた『N-E.X.T.(ネクスト) ハイスクール構想』～【概要】(2026年2月)を基に編集部で作成。下線は編集部による。

図2 教師が感じる「自校の特色化・魅力化」の必要性

Q. ご勤務校において「自校の特色化・魅力化」に取り組む必要性をどの程度感じますか。



※図2・3ともに、『VIEW next』高校版 読者モニターアンケート結果より(アンケートは2026年3月にウェブで実施。有効回答数は107)。

図3 特色化・魅力化の推進にあたっての課題

Q. 自校の特色化・魅力化に取り組む上での課題を教えてください。

- あまりにも取り組み内容が飛躍しすぎていて、どんな生徒像を目標にしているのか分からないところがある。(北海道・私立)
- 特定の分野の資格が取得できるコースを設置したものの、現時点では受験者数の増加にはつながっていない。(千葉県・公立)
- 特色化・魅力化を「自分たちがよいと思うもの」という基準だけで設計してしまうと、社会が求めていることや外の世界の変化との整合性が取れなくなる。(静岡県・私立)
- 取り組みに対する教師の温度差がある。また、取り組みがなかなか学校への評価につながらない。(長崎県・公立)
- 教育目標を教師間に浸透させ、それに基づいた教育活動を実践することが難しい。(愛知県・私立)

文部科学省は、高校改革の方向性を3つの視点で示している(図1)。本誌の読者からも、「この少子化の時代に、必要とされる学校であり続けるために、特色化・魅力化は必須」「生徒が自分の興味・関心に合わせて学べる学校になるために、画一的な教育課程から脱却しなければならない」といった声があり、「自校の特色化・魅力化」の必要性を感じている教師は約8割に上った(図2)。一方、

特色化・魅力化の推進においては、その方向性や教師間の温度差などについての課題があるようだ(図3)。そうした課題が生じるのは、「特色化」と「魅力化」のそれぞれが意味することについて、校内で共通理解が図れていないからではないだろうか。そこで今号では、特色化・魅力化が意味することを整理した上で、各校が特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのかについて考えていく。

先生方とともに  
考えたい「問い」

特色化・魅力化のそれぞれが意味することは何か。  
各校は特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのか。

# 自校の「特色」を明確化し、 生徒が感じる「魅力」を高める

普通科を含むすべての高校に「生徒を主語にした」魅力的な学校づくりが求められている。

なぜ、高校の特色化・魅力化が必要とされているのか。

どのようにそれを推進していけばよいのか。

神奈川県立横浜翠嵐高校の元校長で、全国普通科高等学校長会

事務局長として全国の高校を知る佐藤到先生と

普通科改革の先駆的な取り組みの経験を持つ

長崎県立佐世保南高校の舟越裕校長に、

VIEW next 編集部<sup>あおき・あやこ</sup>の青木彩子が話を聞いた。



長崎県立  
佐世保南高校  
校長  
舟越 裕<sup>ひろし</sup>



全国普通科高等学校長会  
事務局長  
佐藤 到<sup>いたる</sup>

社会の変化や多様な生徒に  
応えられる特色や魅力を

**青木** 2022年度から文部科学省が

推進している「新時代に対応した高等学校改革推進事業」を始めとして、近年、「生徒を主語にした」高校教育の実現に向けて、すべての高校において特色・魅力ある教育の実現が求められています。26年2月に文部科学省が示した「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想」(\*)においても、専門高校改革や普通科改革を通じて高校の特色化・魅力化を図っていく必要性や、小規模校の特色化・魅力化のための教育条件の改善等が示されています。なぜ、高校の特色化・魅力化が必要とされているのでしょうか。

**佐藤** 現在、高校等への進学率は約99%に達し、その約7割の生徒が普通科に在籍しています。ただこれまで、普通科の教育内容は中学生や保護者には高校ごとの違いが分かりにくく、「行きたい高校」ではなく、「入れる高校」を選んでいた生徒が少なくなかったのではないのでしょうか。しかし、少子化が進み、多くの自治体で公立高校の学区が撤廃される中、各高校は自校の特色・魅力を中学生や保護者に伝え、選ばれる高校になる必要性が生じてきま

進行



VIEW next  
編集部  
青木彩子<sup>あおき・あやこ</sup>

した。また、実社会につながる生きた授業の実践も、特色の1つとして高校に求められています。「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想」が示されたのも、Society 5.0に対応できる、文理にとられない幅広い教養等を備えた新しい価値を創造する人材の育成に高校も寄与することが期待されているからです。

**舟越** 長崎県では、これまでは多くの生徒、保護者が、公立高校の普通科を進学先の第一候補として考えていました。しかし近年、私立高校が新コースの設置や部活動の強化などを通じて特色化を図り、私立高校の授業料も無償化されたことで、生徒、保護者にとって私立高校の魅力が高まりました。また、生徒の学力や希望進路などが多様化する中で、特に公立高校は、これまでと同じような横並びでよいのかと社会から問われているように思います。長崎県では少子化が進み、高校の再編統合が進む見通しですが、高校の数の調整だけではなく、各地域にどのような高校を残し、創っていくのかを考えていく必要があると思っています。

\* 高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想～」

# どう進める？高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

特色は学校と教師がつくるもの、  
魅力は生徒が感じるもの

**青木** 現場の先生方は、特色化・魅力化の必要性は感じていられるけれども、その推進には課題があるようです（P.3 図2・3）。先生方の声から、その課題の真因の1つに、特色化・魅力化はそれぞれ何を意味するのか、校内で共通理解が図れていないことがあるのではないかと感じました。高校の特色化・魅力化はどのようなものとして捉えればよいと思われませんか。

**佐藤** 私は学校の「特色」は、学校自身や設置自治体が地域のニーズなどを踏まえて骨組みを設計し、授業などの日々の教育活動を通じて教師たちがつくり上げていくものだと思っています。一方「魅力」は、特色ある教育活動を通じて生徒たちが感じる楽しさや

学びがい、満足感だと考えています。  
**青木** 今のお話を踏まえると、自校の特色化・魅力化は、「自校の独自性が明確か」「生徒や保護者・地域が満足しているか」という2つの視点で整理できそうです（図1・2）。

**舟越** 私が24年度3月まで3年間校長を務めた長崎県立松浦高校は、22年度にそれまでの普通科を、地域課題などの探究に重点的に取り組む地域科学科に改編しました。私たち教師が力を入れたのは、地域科学科とはどのような特色を持った学科なのかを生徒や保護者に伝えることでした。つまり、図2

の取り組み③の状態から取り組み①の状態にすることを目指したのです。また、私は、教育活動自体には明確な独自性がない中でも、学校が持つ自由な校風のおかげで生徒たちを引きつけていた、取り組み②のようなことを行っている学校に勤務したこともありまし

ふなこし・ひろし 長崎県立佐世保北高校で進路指導主事として同校の進路指導をけん引。同・佐世保西高校で教頭、同・松浦高校で校長を務め、25年度から現職。教諭時代の担当教科は地理歴史科（日本史）。

さとう・いたる 神奈川県立松陽高校、同・横浜翠嵐高校で校長を務めた後、神奈川県立総合教育センター顧問、横浜国立大学教職大学院連携教授を歴任。22年度から現職。教諭時代の担当教科は地理歴史科・公民科（地理・福祉科）。

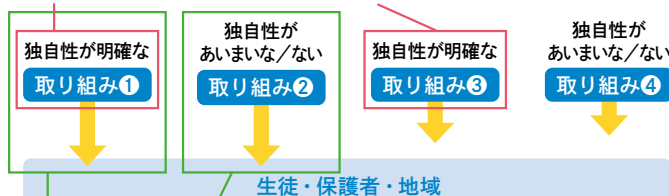
図1 特色化と魅力化の意味

|     | 特色化                                                                             | 魅力化                                                                                             |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 意味  | 自校の独自性を明確にすること                                                                  | 「この学校に来てよかった」「この学校があつてよかった」と生徒・保護者・地域が満足している状態をつくること                                            |
| 留意点 | <ul style="list-style-type: none"> <li>他校との比較に基づく</li> <li>客観的な評価が可能</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒・保護者・地域の人々一人ひとりの評価に基づく</li> <li>主観的な評価によるもの</li> </ul> |

※取材を基に編集部で作成。

図2 特色化と魅力化の関係

特色化できている（自校の独自性が明確になっている）



魅力化できている（取り組みの価値が届き、生徒・保護者・地域が満足している）

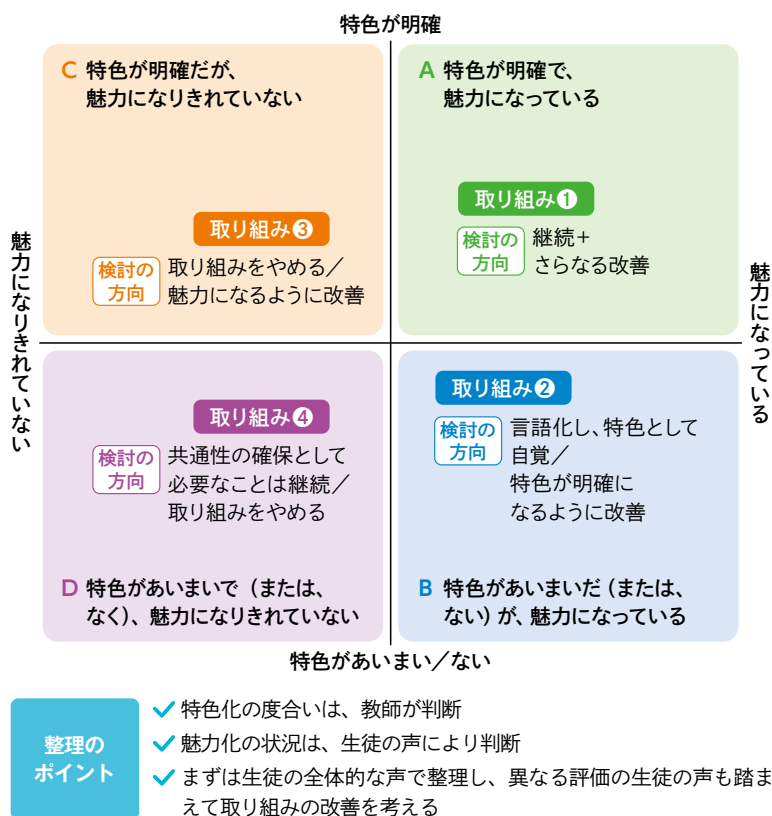
- ・取り組み①は、独自性が明確で（＝特色化）、生徒・保護者・地域が満足している（＝魅力化）理想的な状態。
- ・取り組み②は、独自性があいまいだ（または、ない）が、生徒・保護者・地域が満足しているものなので継続すべき取り組み。特色として自覚したり、独自性を明確にしたりすれば、一層魅力を高められる可能性がある。
- ・取り組み③は、生徒・保護者・地域にはその価値が届いていないが、独自性が明確なので、改善の余地あり。

※取材を基に編集部で作成。

た。取り組み①や取り組み②のようなことを行っている学校では、生徒が「自分に合った学び、高校生活だ」などと満足感を持ち、それを家庭や地域で語ることで、中学生やその保護者も魅力を感じるようになるのだと思います。  
**佐藤** 例えば成果などが数値として表れにくい探究学習の価値について、生徒の前にまずは教師が、自校の探究学習のよさを深く理解しておくことが不可欠です。探究学習を推進するために学校設定教科・科目を設ける学校もあります。探究学習のよさを深く理解していただくために、同教科・科目において生徒

が何を、どのように学ぶのかを、教師たちが熟議し、十分に理解しながらつくり上げるほど、生徒は探究学習に魅力を感じるようになると思います。  
**舟越** 松浦高校在任中、先生方と話し合い、地域に対する理解を深める学校設定科目「松浦学」を設定することにして、さらに長崎大学教育学部と連携し、数学、英語などの6教科で、地域の素材を活用した公開授業を実施しました。そうした取り組みを通じて私たち教師は、地域科学科とはどのような学科なのかを深く理解していったよう

図3 自校の取り組みの現状を整理する4象限マトリクス



※取材を基に編集部で作成。

に思います。現在の勤務校である長崎県立佐世保南高校は、23年度に普通科とは別に文理探究科を設置しました。本校においても、総合的な探究の時間を軸にしつつ、カリキュラム全体のあり方を検討し続けることで、文理探究科の特色をより鮮明に打ち出していくことができると思っています。

**佐藤** 私は、自校の特色を生徒や保護者に伝える教師の言葉を大切にしています。かつて校長を務めた神奈川県の立横浜翠嵐高校では「高校生としての覚悟」を生徒に求め、「生徒の心に火をつける授業」を全教師が標榜（ひょうぼう）していました。学校として大切な理念、目標を日々生徒と接する教師が言葉にし、意識し続けることで、生徒の意識変容を促し、学びの質を高めるのと同時に、それを魅力として捉える生徒の「構え」をつくれるのだと思います。

**舟越** 私は26年5月に横浜翠嵐高校を訪問したのですが、「高校生としての

**青木** 実際に自校で特色化・魅力化を推進していく上でのポイント、そして管理職に求められる役割や視点について教えてください。

**佐藤** 自校の取り組みについて、特色が明確かどうか、それが生徒にとって魅力になっているかを整理することから始めるとよいと思います。例えば、図3のような4象限マトリクスを用いて、自校の特色や魅力となっていると思う取り組みをプロットしてみます。取り組みの現状を可視化することで教師間の現状認識がそろい、改善の方向性についても議論がしやすくなるでしょう。ただし、同じ取り組みであっても、生徒一人ひとりが感じる魅力やその度合いは異なることや、一人ひとりの「多様性への対応」と併せて、社会

教師のやりがいがある  
自校の特色や魅力を高める

「覚悟」という言葉を、管理職だけでなく、若手・中堅の先生が口にすることも聞き、すごいことだと思いました。

**佐藤** 公立高校には様々な経験、価値観を持った教師が異動してきます。だからこそ「本校のスタンダードはこれです」と、管理職が力強いメッセージを発信し続けることが重要です。

で生きていくために必要となる資質・能力を共通して身につける「共通性の確保」も学校には求められていることについて、教師間で共通認識を図ることが重要です。日々教室で多様な生徒に向き合いながら、生徒一人ひとりの満足感を高めつつ、共通性を確保していくために奮闘している先生方への敬意を管理職は忘れてはいけません。先



## 図4 「本校でどのような生徒を育成するか」プロジェクトの議論の成果

## ■本校で育成する資質・能力

## ・自己を向上させる力

|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 意志力 | 主体的・積極的に物事にあたり、自分の考えをもって最後までやり抜く力  |
| 徹底力 | 健康な心身で自分を律しつつ、当たり前前を当たり前に行うことができる力 |
| 成長力 | 自分の現状を把握し調整しながら、確かな学力を培い、将来を展望する力  |

## ・他と協力し やり遂げる力

|     |                                     |
|-----|-------------------------------------|
| 観察力 | 周囲の人・環境に関心を持ち、自分以外のことを知ろうとする力       |
| 共感力 | 多様な考えを受け止め、他者との関係性を築きつつ、物事を俯瞰的に捉える力 |
| 協働力 | 自分と他者を尊重し、共に物事を成し遂げる力               |

## ・物事を探究し 挑戦する力

|     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| 洞察力 | 社会に対する関心を持ち、その状況を多面的に分析、考察できる力   |
| 活用力 | 情報等を選択・比較しながら、集団や社会のために活用していく力   |
| 創造力 | 既存の知識・経験を組み合わせ、新しいアイデアや解決策を生み出す力 |

## ■26年度の各教科における取り組み(抜粋)

## ・国語科

|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 成長力 | 予習・復習を重視しつつ、生徒の学力に合わせた教材の活用と展開をする。 |
| 共感力 | 班別活動における資料作成と相互発表および相互評価を展開する。     |
| 洞察力 | 評論文や意見文の読解、および意見文の作成活動を展開する。       |

## ・地理歴史科・公民科

|     |                                                             |
|-----|-------------------------------------------------------------|
| 成長力 | 自主的な課題を設定し、取り組む。                                            |
| 協働力 | 共通のテーマ・課題に対し、多面的に考察し、合意形成を図る。                               |
| 洞察力 | なぜその歴史的事象・社会的事象が生じたかを考えさせる発問を行い、発表する。時事ニュースを授業の中で適宜動画で紹介する。 |



各教科における取り組みが記されている全体は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/ または右の2次元コードからアクセスしてください。



※学校資料を基に編集部で作成。

生方が多様な生徒を受け止め、新しい教育活動にも安心して挑戦していけるよう、先生方の心理的安全性が確保されているか、そして心の中に「余白」があるかどうか、ぜひ心を配っていただきたいと思います。

**舟越** コーディネーターや学校に関心を持つ地域の人たちなどを、生徒を主語にした学校の未来をともに考える仲間として、その力を借りることも重要です。そうした方たちも交えて、図3

(P.6)などを基に、これからの学校のあり方を議論できればよいですね。  
**佐藤** 多くの高校が小規模化し、生徒数も教師数も減少していますが、学校の業務は減らず、新しい課題も生まれています。教育力の向上は、学校だけで取り組むには限界があり、外部との協働が一層求められると思います。  
**舟越** 特色化や魅力化の推進では、自校の教育目標や育てたい生徒像を確認することがその前提となります。管理

職はビジョンを示しますが、具現化していくのはミドルリーダーが中心の組織です。もちろん、特色や魅力のある教育課程を編成したり、生徒に育みたい資質・能力を具体的な教科や授業に落とし込んだりするためには、管理職が各教科の学習内容がある程度理解しておかなければ、先生方の課題意識に合った指針は出せません。私ももっと勉強しなければと思います。

**佐藤** ミドルリーダーに任せる際には、どのように仕事を任せるかが極めて重要です。丸投げにも過干渉にもならないようにするためには、いつまでに、何を、どこに注意してやってほしいのか、要点を端的に言語化する力が管理職には求められると思います。

**舟越** 自分の学校に愛着があれば先生方は主体的に動き始めますし、愛着を持つてもらうためには、管理職が先生方に任せることが大切です。佐世保南高校では、「本校でどのような生徒を育成するか」プロジェクトを立ち上げ、育成を目指す資質・能力と、その育成のための授業のあり方を、各教科・分掌などの副主任が中心となって議論をし、「26年度 南高で育成する資質・能力」としてまとめました(図4)。学校のあり方を教師が主体的に考えていくようになれば、おのずと特色や魅力も高まっていくと私は思います。

**青木** 佐藤先生からは特色化・魅力化をけん引する管理職の先生方にメッセージを、舟越先生からは管理職としての今後の展望をお話しいただけますか。

**佐藤** 全国の校長先生と話す中で、私はすべての高校に特色・魅力はあると確信しています。だからこそ、まずは学校内で現状を言語化して共有することで、自校の特色や魅力を捉え直すことができますし、学校間でいろいろな知見を交換することで、さらに各高校の特色化・魅力化が進むはずですね。そして、生徒自身が自校の魅力を発信することで、中学生や保護者・地域にもそれが伝わり、社会の高校に対する見方がより豊かになると思います。

**舟越** 現任校のある佐世保市は重工業が市の基幹産業ですから、理系人材の育成は文理探究科を設置する本校の使命の1つだと私は考えています。そのような考えを先生方に伝えるとともに、先生方からも本校をどのようにに発展させていきたいかを聞き、ともに学校づくりをしていきたいと思っています。

**佐藤** どの高校にも、生徒を多彩な学びや進路に導ける可能性があります。自校のこれまでのよさを土台として、生徒を主語にした特色化・魅力化を推進していただきたいと思います。  
**青木** ありがとうございます。

## 事例1 市部・公立

# 学校設定教科を学びの土台とし、 時代に対応する文理融合型の 新しい普通科を創る

熊本県・熊本市立必由館高校

### 特色化・魅力化の推進の背景

時代が求める普通科の学びを  
現場の教師たちが模索

2024年度に普通科から文理総合探究科へと学科改編した熊本県・熊本市立必由館高校。2年間にわたる検討で校内の教師の合意形成を図った上で、探究を軸とする文理融合的な学びの実現に向けて、探究学習を始めとしたすべての学びを支える学校設定教科を設定し、キャリア教育や情報の充実に取り組み組んだ。さらに学年ごとの到達目標やその達成に必要な3年間の指導をグランドデザインに落とし込み、教師間で共有。その結果、学びに対する生徒の主体性の向上や探究学習の進路選択への寄与が、生徒の姿や声から確認されるとともに、教科を超えた教師間の連携も進んでいる。

2022年、熊本市教育委員会（以下、市教委）はこれからの社会を見据えて、主体的に学ぶ意欲や態度を育成する特色・魅力ある学校をつくるため、必由館高校に「新たな普通科教育を主とする学科」を設置し、教科等横断的・探究的な学びを充実させ、幅広い進路選択に対応する教育課程を編成する基本方針を示した（\*1）。普通・国際・芸術・服飾デザインの4コースを設置する普通科であった同校はその方針に基づき、新学科名や教育課程の検討を始めた。佐藤宏一校長は説明する。

「前年度の21年度に素案が示されましたが、その内容は必由館高校のこれ

までの伝統にそぐわないのではないかとといった懸念の声が生徒や教職員、同窓生から上がり、22年度の基本方針へと改められました。校内においても、社会が大きく変化する中、必由館高校のよさを生かしながら、生徒が学ぶ内容を自らの将来と結びつけて、主体的に学びに向かう学校づくりをしていくという機運が高まり、市教委とも協議を重ね、22年度から文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の採択校として、新しい普通科への改編に向けた検討が始まりました」

生徒の希望進路や興味・関心が多様化する中で、文系・理系を横断した視点を持ち、個別最適な学びを実現する必要性を多くの教師が実感していたと佐藤校長は語る。「何を教えるか」から「どのような資質・能力を育成する



カリキュラム開発・研究部  
**渡邊 健己**  
わたなべ・けんじ  
同校に赴任して3年目。  
理科（生物）。



デジタル推進部長  
**宮川 和之**  
みやがわ・かずゆき  
同校に赴任して6年目。  
情報科。



カリキュラム開発・研究部長  
**中島 千晴**  
なかしま・ちはる  
同校に赴任して3年目。  
音楽科。



進路指導主事  
**花川 貴三子**  
はなかわ・きみこ  
同校に赴任して24年目。  
英語科。



教頭  
**森田 勇**  
もりた・いさむ  
同校に赴任して6年目。



校長  
**佐藤 宏一**  
さとう・ひろいち  
同校に赴任して16年目。

\*1 熊本市教育委員会「市立高等学校・専門学校改革基本計画（必由館高等学校編）」

## どう進める？高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

か」への転換を図るべく、育成を目指す資質・能力の明確化も含め、市教委と同校の教師が検討を重ねた。2年間にわたる学校教育目標や新学科の教育課程の検討を経て、同校の普通科は、探究学習を軸とする文理融合の教育を特色とする文理総合探究科（文理・芸術・生活デザインの3コース）に改編し、24年度に1期生を迎えた。

## 具体的な取り組み

学校設定教科で、地域と連携した探究学習を支える

市教委と同校の協議の上で決定した新学科のキャッチフレーズ（現在の学校教育目標）は、「出あう つながるとともに創る」必由館でやりたいをカタチに」。新しい教育課程の特徴は「すべてを統合的に学習する」ことだ（図1）。文理融合的な学びの軸となる探究

## 学校概要

設立 1911（明治44）年  
形態 全日制／文理総合探究科／共学  
生徒数 1学年305人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、高知大、福岡教育大、佐賀大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、熊本県立大、沖縄県立芸術大などに48人が合格。私立大は、駒澤大、武蔵野音楽大、龍谷大、福岡大、熊本学園大、崇城大、立命館アジア太平洋大などに延べ357人が合格。短大・専門学校進学80人。就職7人。

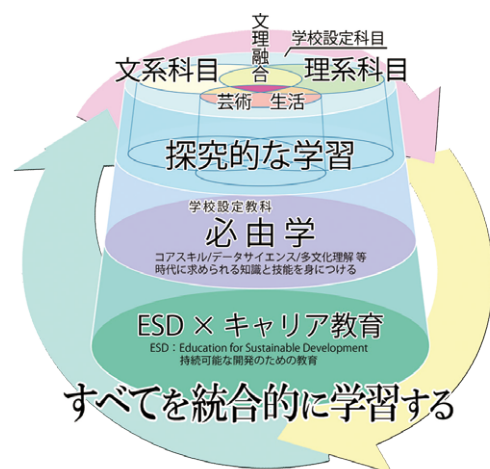
学習では、「感じる探究」イベントを開催。市役所や企業等のブースを生徒が巡り、地域・社会課題に触れて探究のタネを見つける。その後も各所と連携しながら、生徒が地域のおさや課題を自分ごととして捉え、課題解決に必要な思考力を3年間を通して育成する。様々な「ひと・もの・こと」に出あい、つながり、課題を設定し探究する中で、生徒は教科の枠を超えて知識を結びつけ、文理双方の視点を活用。成果を年度末の「探究フェスタ」で発表する。

探究を軸とする文理融合的な学びを支えているのが、1・2年次で必修の学校設定教科・必由学だ（図2）。

「必由学は、コアスキル・データサイエンス・多文化理解を柱とする、これからの社会ではばたか

ための基礎力の育成を目的として、週あたり1コマ実施しています。職業人へのインタビューや熊本の課題に関するデータの分析、海外との交流などを通して、探究学習はもちろん、すべての教科・科目に必要で、生徒が実社会に出てからも役立つ資質・能力を育んでいます」（カリキュラム開発・研究部長・中島千晴先生）

図1 文理総合探究科での学び



※学校資料をそのまま掲載。

24年度からDXハイスクールに採択されている同校では、必由学とDXハイスクールの取り組みを連動させた教科等横断型の学びも推進している。

「必由学で身につけた情報処理のスキルを生かして、体育や部活動で生徒たちが撮影した動画を基に動作解析を行ったり、探究学習の中で一流のアスリートと高校生とのフォームを重ね合わせて比較したりするなど、数理的アプローチに挑戦する生徒もいます」（デジタル推進部長・宮川和之先生）

半導体産業の拡大に伴い、熊本県内のデジタル人材の需要が急増する中、同校は25年度から市教委や熊本大学と共同して、小・中学生・高校生のDXと理系分野の基礎・応用力の育成を目指す。

図2 学校設定教科・必由学で伸ばす力



※学校資料を抜粋して掲載。

指す「みらいの科学者・DX人材共創プロジェクト」に探究学習の中で取り組んでいる。

「地域の小・中学生が理系・デジタル分野に興味を持つきっかけとなるよう、本校の生徒が教師役になり、小・中学生を前に電子顕微鏡や分光光度計といった機器を使って実験・観察を行います。本校の生徒にとっても、大学や企業が持つ最先端の機器に触れるよい機会となっています」（カリキュラム開発・研究部・渡邊竜己先生）

そのように、同校の生徒たちは必由学で身につけた様々な資質・能力を探究学習の中で実践的に発揮することで、高校での学びの価値を実感しながら教科の学びも深めている。

特色化・魅力化の推進のポイント

議論の進捗・内容を丁寧に見直し、目指す教育の形を可視化

普通科改編までの2年間の議論で管理職が留意したのが、校内の約70人の教師との合意形成だ。管理職・探究部長・教務主任などが参加し、週1〜2回の頻度で実施した「コア会議」では、新学科の教育課程について検討。コア会議のメンバーに各コースの主任や教科代表者などを加えた約20人が参加し、月1〜2回の頻度で実施した「学校改革プロジェクト委員会」では、学校設定教科・科目の研究などを行ないながら、各教科・分掌に議論の進捗を共有した。森田勇教頭は「会議は情報共有の場であり、教科を超えたコミュニケーションの場でもあった」と語る。

「会議では、教科・分掌を超えて先生方が率直に自分の考えや思いを語り合えるような雰囲気づくりに努めるとともに、少人数の話し合いは、できるだけ多くの先生にその様子を知ってもらうために、会議室ではなく、あえて職員室内のミーティングスペースなどを利用するようにしました」

そうして編成された教育課程の実施を経た24年度と25年度に、卒業を間近に控えた3年生を対象としたアンケート調査を行ったところ、総合的な探究

の時間を始めとする探究学習が「自分の進路に大きく影響した」「将来、社会に出ていく上で役に立つと思う」と答えた生徒の割合はいずれも90%以上だった。校内で開放されている最先端の設備を整えた「デジタル探究室」に自主的に集まり、創作活動や探究学習に取り組むなど、主体的に探究学習の問いを立て、課題に取り組む生徒も増え、教師たちは手応えを感じている。

加えて、問題解決に向かう際の生徒の強みや行動特性を把握するために、25年度には1・2年生がベネッセの「GPS-Academic（\*2）」を受検した。

「本校の生徒の強みである協働的思考力が向上していることが、『GPS-Academic』の受検結果で明らかになりました。必由学で身につけたスキルを生かした探究学習を通して、どのような資質・能力が生徒に育まっているのかを検証し、生徒が自身のキャリア形成に生かせる支援のあり方を考えていきたいと思っています」（進路指導主事・花川貴三子先生）

生徒の変容を起点にした本校の特色化や魅力化を追求し続けるため、26年度には学年ごとの到達目標やその達成に必要な探究学習などの流れを明確化した「グランドデザイン（図3）」を完成させた。それにより、必由学ではいつ、何を学んでいるのか、身につけたスキ

図3 総合的な探究の時間、必由学、情報、キャリア教育をつなげる3年間のグランドデザイン（抜粋）

【学年テーマ：夢を持とう!!】自己の興味・関心に基づく問いを深め、将来像を明確にするとともに、その実現に必要な論理的・批判的思考力や情報活用能力を育成する。探究活動や地域連携、発表の機会を通して、実社会とつながりながらキャリアビジョンを具体化する。  
【手立ての重点】・校内外での発表機会の充実 ・地域（市役所等）との連携による社会との接続 ・キャリアビジョンの明確化と設計

|     |                            | 4月                                                                                                           | 5月                                                             | 6月                                             | 7月             |
|-----|----------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|----------------|
| 2年生 | ・キャリア教育<br>・アセスメント<br>・LHR | スタディー<br>サポート                                                                                                | コース選択<br>のための<br>進路探究                                          | コース選択<br>のための<br>進路講演会<br><br>GPS-<br>Academic | 進研模試<br>(7月記述) |
|     | 総合的な<br>探究の時間              | ③個人探究（コースに分かれて探究を行う）<br> |                                                                |                                                |                |
|     |                            | 【問いの設定】<br>スキル D、I                                                                                           |                                                                | 【情報収集（フィールドワーク、外部講師）】<br>スキル B、C、E             |                |
|     | 必由学Ⅱ<br>(スキル)              | I：自己の現状を客観的に分析し、計画を立てる<br>SWOT分析・学習理論                                                                        | J：思考の可視化・事象の多角的分析・データ収集を実践する<br>Visible Thinking・多文化比較・アンケート設計 |                                                |                |
|     |                            | 情報Ⅰ                                                                                                          | F：【知識】知的財産権（著作権）、個人情報、情報セキュリティ、情報モラルなど                         |                                                |                |
|     |                            |                                                                                                              | K：質問力の向上・課題解決・データに案を行う<br>質問力・在留外国人                            |                                                |                |

\*学校資料を基に編集部で作成。総合的な探究の時間に書かれている「スキル」は、必由学で身につけるもので、具体的にどのスキルを用いるのかが明示されている。



グランドデザイン全体は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ルを各教科の授業などにどのように生かせるのか、すべての教師が考えやすくなった。グランドデザインを見た教師から、「各教科で協働的な学習が本格化する時期を考慮すると、人間関係の構築に必要なスキルを習得する必由学の授業は、もう少し早く実施した方がよいのではないか」といった声が上がった。教科や分掌を超えた指導改善につながる意見交換が早速行われた。

佐藤校長が大切にしているのは、「ビジョンを明確に示しつつ、教師の挑戦を支援することだ」。

「必由学は、導入後2年間は有志の5人の教師がフロントランナーとして

指導計画を立案し、授業を担当しました。3年目となる26年度からは、これまでのノウハウを共有しながら、約70人の教師全員で取り組んでいます。チームティーチング形式を取り入れ、各教師には、必由学で生徒が身につけるスキルのうち、自分が得意とするものを踏まえて担当する授業を選んでもらうなど、先生方が安心して挑戦できる環境づくりをしています」（佐藤校長）

文理や教科、さらに学校の枠を超えて地域と連携した学びを実現した必由館高校。生徒たちが感じている母校の学びの価値を、同校の教師たちも確かに感じ取っている。

\*2 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

事例2  
市部・私立

# 暗黙知として受け継がれてきた 全人教育の文化を言語化。 教師と生徒の共通の指針に 大阪府・私立大阪高校

## 特色化・魅力化の推進の背景

深刻な定員割れを機に、  
魅力的な教育活動を模索

23年前の深刻な定員割れを機に、教育活動の改革を推進してきた大阪府・私立大阪高校。様々な試行錯誤の根底には、建学の精神である「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」に基づき、「生徒一人ひとりの成長のために」尽くす学校文化があった。2020年度からは目指す生徒像に「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を掲げ、生徒主体の多彩な活動を展開。生徒が企画・運営を担うオープンスクールや、身の回りの科学に関する事象をスケッチブックにまとめて他者に説明することを通じて科学リテラシーを社会に広めていく活動である「Nプロジェクト」など、独自の取り組みが定着し、現在ではそれらに参加することを目的に入学する生徒が増えている。

2027年度に創立100周年を迎える大阪府・私立大阪高校は、創立当時の社会課題の1つだった学校不足を解消すべく、「弱きものを扶ける」という理念の下で開校された旧制中学校を前身とする。「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」を建学の精神に掲げ、幅広く生徒を受け入れ、一人ひとりの成長を第一に考える教育を実践してきた。平野宏太校長は自校の文化をこう語る。

「本校は創立以来、進学実績に重点を置く教育とは一定の距離を取り、全人教育を基本としてきました。入学者は中学校時代の学力が中位層だった生

徒が中心で、やりたいことがまだ明確ではない生徒が少なくありません。そうした生徒が本校で力を伸ばし、やりたいことを見つけ、希望進路を実現できるように教師が寄り添う、その面見のよさが学校文化として根づいています」

しかし同校は23年前、深刻な定員割れを起こし、学校の存続が危ぶまれる状況に陥った。カリキュラムの改訂や制服の刷新など、あらゆる手を尽くし、08年度には男子校から共学化。そうして定員割れは解消されたが、以降も自校の特色を模索し続けたと、北村恭崇教頭は説明する。

「とにかく入学した生徒が大きく成長して卒業していつてほしいと、必死に教育活動を改善しました。しかし、何が生徒の確保につながっているかは

## 学校概要

**設立** 1927（昭和2）年  
**形態** 全日制／普通科／共学  
**生徒数** 1学年約600人  
**2025年度卒業生進路実績** 国公立大は、島根大、北九州市立大に2人が合格。私立大は、中央大、日本大、京都産業大、京都女子大、同志社女子大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、大和大、関西学院大、甲南大、武庫川女子大などに延べ491人が合格。海外大は、1人が合格。短大・専門学校進学165人。就職20人。



**石丸雄基**  
文理特進コース長  
いしまる・ゆうき  
同校に赴任して10年目。  
理科（化学）。



**宮本 聡**  
1学年主任  
みやもと・さとし  
同校に赴任して7年目。  
国語科。



**辻 晃子**  
入試広報部部長  
つじ・あきこ  
同校に赴任して19年目。  
3学年副主任。理科（生物）。



**北村恭崇**  
教頭  
きたむら・やすたか  
同校に赴任して25年目。



**平野宏太**  
校長  
ひらの・こうた  
同校に赴任して25年目。

図1 「主体的に行動する“オモロイ”18歳」の育成に向けた活動(例)

|               |                                                                     |
|---------------|---------------------------------------------------------------------|
| 夏期・春期講座       | 教師が担当教科に加えて、趣味や勉強中の分野をテーマにした講座を開講。心理学やボクササイズなど、テーマは多彩で、年間約100講座を開講。 |
| CHOLAゼミ(コラゼミ) | 大学や専門学校、企業と連携して、様々な分野の学びに取り組む放課後講座(全3回)。年間約20講座を開講。                 |
| オホーツク学        | 東京農業大学と連携したプログラムで、オホーツクの自然や地域資源について現地に赴いて学び、日本の農学の未来や地域創生について考える。   |

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 学校の魅力を発信する生徒の活動

#### OS委員会(オープンスクール企画運営委員会):2017年度～

オープンスクール(OS)や学校説明会の企画・運営を担う委員会で、生徒は立候補して委員となる。委員長・副委員長の立候補者は、立候補の理由ややりたい企画などを「熱血志望シート」という用紙に1,000字以内で記入し、入試広報部に提出する。同部の教師の入念な選考によって決定した委員長、副委員長は様々な企画を立て、委員に提案。委員はそれぞれ自分がやりたい企画に参加し、当日の運営まで担当する。25年度は委員長3人、副委員長10人で、約170人の生徒が委員として参加した。



OSでは生徒が発案した企画が実施される。

#### PR委員会:2019年度～

生徒目線での学校の魅力の発信を目的に、広告会社と連携してパンフレットやポスター、OSで配布するグッズなどを制作する。パンフレットなどに使う写真も委員の生徒が撮影。バスの車体広告(ラッピングバス)のデザインにも挑戦した。委員には立候補してなり、25年度は約40人の生徒が参加。



PR委員会が作成した27年度入試ポスター。

※学校資料を基に編集部で作成。

曖昧で、教師自身が自校の特色を明言できないような状態でした」

「ユニークな進学校」「あったかい学校」といったキャッチコピーを打ち出したこともあったが、自校の本質を表現しているとは言い難く、定着しなかった。進学実績を重視する方針への転換も議論されたが、創立以来の方針を貫き、結果的にその道は選ばなかった。そうした中、探究学習の力キュラムを考える際の参考にするため、京都府・京都市立堀川高校を20年度に視察。同校の最高目標「『自立する18歳』の育成」に着想を得て、当時教頭だった平野校長が、目指す生徒像として「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を当時の校長に提案した。

「一見積極的ではない生徒も、心の

中では『何かを成し遂げたい』と思っています。そんな生徒が自分で課題を見つけ、動き出せるようになってほしいという願いから『主体的に』という言葉を入れました。また、『オモロイ』という言葉は、本校では心理学者の河合隼雄氏の著書での説明を土台として、『人の心や身体を動かすような』と解釈しており、『周囲を巻き込んで協働できる』という意味を込めています」

提案は承認され、その目指す生徒像は学内外で発信されるようになった。そして、『主体的に行動する『オモロイ』18歳』の視点で校内を見たところ、その育成につながる活動がいくつもあることに同校の教師は気がついた。

「本校は実に様々な挑戦をしてきましたが、その根底には常に『生徒一人

ひとりの成長のために』という軸があり、活動を経て成長していく生徒の姿も実際に見てきました。暗黙知として受け継がれてきた創立の理念や建学の精神を今の言葉に表現したのが『主体的に行動する『オモロイ』18歳』であり、生徒の具体的な姿から本校の特色が明確になっていきました」(北村教頭)

具体的な取り組み

様々な経験から関心を広げ、やりたいことを見いだす

同校では現在、『主体的に行動する『オモロイ』18歳』の育成に向け、生徒が関心を広げ、力を発揮できるよう、多彩な活動を展開している(図1)。

有志の生徒が学校の魅力を発信する

活動も同校の特色の1つで、具体的にはオープンスクール(以下、OS)の企画・運営を行う「OS委員会」と広報活動を行う「PR委員会」がある(図2)。OS委員会は、OSのプログラムの企画・運営、会場の設営や受け付けなど、全工程を担う。入試広報部長の辻見子先生はこう語る。

「私がOSの準備をしていた際、何かやりたそうにしていた生徒に『手伝う?』と声をかけたのが、OS委員会発足のきっかけでした。部活動のリーダー紹介や生徒が講師となる探究学習の模擬授業など、生徒がそれぞれ自分の言葉で本校での経験を熱心に語る姿は『主体的に行動する『オモロイ』18歳』そのもので、そうした生徒の姿を通じて本校の魅力が中学生や保護者に十分伝わっていると感じています」

委員長と副委員長には数十人もの生徒が立候補する。生徒は立候補の理由などを記した「熱血志望シート」を提出し、入試広報部がそれを基に選考する。

「OS委員会の活動がその生徒の成長の機会として最適か」という視点で部内で議論し、選考しています。選ばれなかった生徒には理由を丁寧に説明して、前向きなチャレンジにつながるように対話を重ねます」(辻先生)

生徒が科学と日常生活とのかかわりなどを学び、その内容をスケッチブック

## 図3 生徒主体の外部発信の活動

## Nプロジェクト：2023年度～

同校の卒業生である京都大学複合原子力科学研究所の中村秀仁助教と同校の教師との対話の中で、文理の枠組みを超えて、生徒に科学へのワクワク感や科学リテラシーを持ってほしいという共通の思いが確認されたことから始まったプロジェクト。生徒は化学や地学、家庭科の授業、夏期特別講座などで、放射線やエネルギーといった社会的に重要なテーマについて学び、その内容をスケッチブックに手書きでまとめ、小・中学校での出前授業（写真上）や地域のイベントなどの場で小・中学生や市民に向けて説明する。参加は希望制で、イベントごとに募っており、ある小学校での出前授業には約100人が参加した。

25年の大阪・関西万博では、文部科学省のブースに出展して、来場者に「科学のワクワク」を伝えた（写真中）。世界各国から人々が来場するため、158か国語のスケッチブックを用意（写真下）。約450人の生徒（うち文系の生徒が65%）が交代でブースに立ち、6日間で約1万人と対話した。



※学校資料を基に編集部で作成。

クにまとめて発信する「Nプロジェクト」も同校の特色ある活動の1つだ（図3）。同活動では、文理の枠組みを超えて科学リテラシーを持つ社会をつくることを目指している。プロジェクトを担当する1学年主任の宮本聡先生は同活動を通じて生徒の変化をこう語る。

「小学校での出前授業では、生徒がスケッチブックを片手に自分の言葉で学んだことを語ると、小学生は『楽しかった』『分かりやすかった』『などと言いながら笑顔を見せてくれます。そこでうれしさややりがいを感じた生徒は、うまく説明できなかった部分を調べ直したり、生徒同士で構成を議論したりするなど、自走するようになります。そして、その生き生きした生徒の姿を見た他の生徒が同活動に参加する」という好循環が生まれていま

す。時には準備不足のまま本番を迎える生徒もありますが、教師は口出ししません。周りの生徒のスケッチブックの内容を見て『まずい』と気がつき、どうにか対処しようとする。それも貴重な経験だと私たち教師は捉えています」

最初は学校が用意した場でも、経験を重ねる中で自分がやりたいことを見つければ、生徒は自分で前に進んでいく。そのきっかけづくりこそが母校の強みだと、平野校長は語る。

「入学前にまだ明確な目標がなくても、本校の多彩な活動を通じて関心を広げたり、刺激を受けて学んだりする中で目標を見いだせばよいのです。それが多様な人が集まる学校教育の価値であり、本校が『全日制普通科の魅力』を最大限に発揮する』を目指す学校像に掲げている理由でもあります」

## 特色化・魅力化の推進のポイント

## 受容と寛容の姿勢で教師の挑戦を後押し

同校は、「学校で起こることはすべて生徒の成長の材料である」と捉えている。生徒を「個」で見えて、仮に問題が生じて、それを成長の機会に変えられるような支援を徹底している。その受容と寛容の姿勢は教師に対しても同様で、生徒の成長につながる挑戦を応援する文化が校内に根づいている。

文理特進コース長の石丸雄基先生は、同コースの生徒が学年やクラス（*クラス*）の枠を超え、個々の強みや個性を生かして切磋琢磨するコースづくりに挑戦中だ。

「まずは生徒たちが相互理解を深める機会をつくろうと、初回は気まずい雰囲気が生じることを承知で、異学年で対話をする場を設けました。目指すコースづくりの実現までは長い道のりですが、先生方も賛同してくれたため、実践に踏み切れました」（石丸先生）

平野校長は制度改革を行い、自らの背中を見せて、現場をけん引している。

「26年度から週5日制に変更し、生徒に時間を返しました。私は『責任と権限は現場にある』『生徒や保護者に説明責任を果たせば、結果として失敗しても、管理職が責任を取る』と公言しています。私自身が挑戦し続けると

ともに、先生方の挑戦を評価するのではなく、生徒の成長へ向けて同じ目線で助言することを心がけています」

同校は学校を社会に開くことも大切にしている。社会の中で相対化することで自校の価値がより明確になるためだ。それを校内で共有し、同じ方向を向いた学校づくりにつなげている。石丸先生はさらに次のように思いを語る。

「各校が独自に魅力化を図り、社会に発信することは、生徒を社会全体で支えるという思いの共有や、社会の教育全体の活性化にもつながるはずで、これからも広い視野でコースづくりをしていきたいと思っています」

また、同校は多彩な活動を推進する上で、各活動が属人化しないように留意している。立ち上げ時は特定の教師が中心となって動いたとしても、活動が軌道に乗り始めた段階でいずれかの校務分掌が担当するようにしている。

「生徒からは『自分が変わった』『挑戦する勇気を持った』といった声が聞かれます。OS委員会やNプロジェクトに参加することを目的に入学してくる生徒も増えました。現在は特別活動が本校の特色・魅力の中心ですが、授業の魅力化にも取り組んでいます。これから『主体的に行動する』『オモロイ』『18歳』を育成する学校づくりにまい進していきます」（北村教頭）

### 事例3 郡部・公立

## 地域資源・課題をテーマとする プロセス重視の探究学習を、 町役場と連携して進める 岩手県立葛巻高校

特色化・魅力化の推進の背景

町唯一の高校としての特色を生かした学校を目指す

地元自治体の強力な支援の下、連携型の中高一貫教育や「山村留学」の実施による県内外からの生徒募集などにより早くから取り組んできた岩手県立葛巻高校。葛巻町唯一の高校として、同町ならではの資源や課題をテーマとする探究学習を構築してきた。「町全体で人を育てる」という考えが根づく同町は、探究学習において高校生が試行錯誤するプロセスにこそ学びがあるという同校の考えに共感。同校の探究学習には町役場の職員を始めとする地域の人たちが多くかかわる。地域からは生徒がよく育ち、多様な進路を実現できる高校として評価され、山村留学により同校を卒業した生徒たちが、大学を経て社会人として再び同町に戻ってくる事例も複数生まれている。

岩手県立葛巻高校は2002年度より、同校が所在する葛巻町内の3つの町立中学校と連携型中高一貫教育を推進している。具体的には、数学、英語を中心とする全教科における授業交流や部活動交流など、地域に根差した特色ある教育活動に取り組んできた。

岩手県では少子化に伴う生徒数の長期的な減少が見込まれており、近年、公立高校の学級減や統廃合などの再編が課題となっている。そうした中で、葛巻高校を唯一の高校として擁する葛巻町は、同校が1学年2学級を維持し、教員数を確保することができれば、中高一貫教育を含む町の教育の持続可能

性は高まると考え、生徒募集の一環として「くずまき山村留学」を15年度に県内で初めて導入。寄宿舎の整備や町営学習塾の無料開放といった、葛巻町

による留学生への経済的な支援もあり、同制度導入以降、山村留学で同校に入学した生徒数は26年度に100人を突破した。

菊地健校長は「本校の特色は葛巻町唯一の高校として地域に大切にされていることであり、その特色を生かしながら、生徒が自身のキャリアを展望できる学校をつくるのが本校に期待される役割だ」と語る。

「高校等への進学率が約99%に達し、生徒の興味・関心、希望進路などが多様化している現在では、いずれの高校にも、自校に進学するどのような資質・能力が身につく、人生の可能性が開か

#### 学校概要

設立 1948（昭和23）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約40人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、山形大、茨城大、宇都宮大、釧路公立大、東北公益文科大、高崎経済大に延べ7人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、宮城学院女子大、東北芸術工科大、中央学院大、大正大、東京国際大に延べ8人が合格。短大・専門学校進学15人。就職12人。

れるのかを、生徒や保護者に示すことが求められています。町の資源や課題を題材にした学びを町の人たちとともに体験できるカリキュラムを構築しつつ、そうした町での学びを通して育った生徒の姿を校外に伝えることで、葛巻高校は、地域の人たちが『葛巻町に葛巻高校はなくてはならない存在』『我



教務図書情報部  
一ノ渡 靖彦  
いちのわたり・やすひこ  
同校に赴任して5年目。  
保健体育科。



教務図書情報部  
島山 幸治  
はたけやま・こうじ  
同校に赴任して6年目。  
理科（化学）。



校長  
菊地 健  
きくち・けん  
同校に赴任して1年目。

# どう進める？ 高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

が子を葛巻高校に通わせたい」と思える価値のある高校になるのだと考えています」

## 具体的な取り組み

## 地域と強固に連携した探究学習を推進

葛巻町唯一の高校という特色を生かした同校の教育活動の中心に据えられているのが、総合的な探究の時間である「葛高ミライノカタチプロジェクト」だ。同校のスクール・ポリシーを踏まえて、同時間では「豊かな人間性」「地域貢献心」「思考力・判断力・表現力・探究心」を育成することを目指し、葛巻町や地元企業、近隣の中学校、大学などと連携しながら、1・2年次は2単位、3年次は1単位で地域の魅力や課題などをテーマとする探究学習に取り組む（図1）。

生徒が設定する課題には、「葛巻町・葛巻高校でしかできないこと」が求められる。例えば25年度の2年生は、葛巻町と協働して同町の特産品の1つである「くずまき鍋」の新商品を開発し、町民祭で地域の人たちに振る舞った。その商品は現在、地域の飲食店での販売が検討されている。また、26年度は「酪農の現状と葛巻町の魅力を知ってもらう」という目的の下、3年生が2

図1 総合的な探究の時間 大綱 「葛高ミライノカタチプロジェクト」概念図



※学校資料をそのまま掲載。

泊3日の酪農体験の旅を地元の酪農家と企画・考案し、試験的に実施した。地域と密接に連携した探究学習が実現できているのは、「町と学校が多様な生徒を受け入れ、育ててきた歴史があるからだ」と、教務図書情報部の山幸治先生は語る。

様々な背景を持つ生徒たちと長年接する中で、本校の教師、そして町の人たちの中に、高校生ならではの意見を受け止める土壌がより豊かに育まれていたように思います。実際、本校の生徒は探究学習を通じて町の魅力化につながる様々な提案を行っています。そうした生徒のアクションに対して町役場の人たちは「それ、面白いね」「一緒にやれるか考えてみようか」などと、常に肯定的に生徒に向き合ってくれます」

同校の教師たちは生徒の探究学習に伴走するが、町役場を始めとする地域の人たちとのやり取りは多くの場合、教師を介さず、生徒が直接行っている。

「外部の方とのオンライン会議も生徒は自分たちで設定しますし、校外活動の実施要項は生徒が作成し、起案します。時には失敗しながらも、自分たちで何かを成し遂げるプロセスを高校時代に経験

できることは、今後の進路やキャリアの可能性を大きく広げることにつながると考えています」（畠山先生）

教務図書情報部の一ノ瀬靖彦先生は、成果以上にプロセスに価値を置く自校の探究学習観に地域の人たちも共感してくれていると感じるという。

「生徒の考えには、詰めが甘い部分も少なくないと思います。それでも、高校時代に他者と協働して試行錯誤する経験の価値を分かってくれている町役場の皆さんは、生徒の話にじっくりと耳を傾けてくれます。人を育てることの大きさを町と共有できていることは本校の大きな強みの1つです」

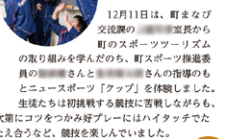
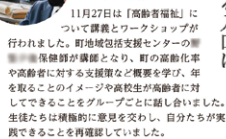
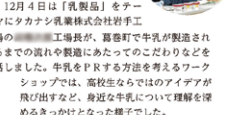
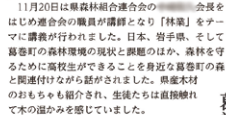
## 特色化・魅力化の推進のポイント

目的に立ち返れるように取り組みを見える化する

探究学習を始めとする同校の教育活動の実態を地域に伝えることも、同校と町が一体となつて進めている。

例えば、同校の探究学習の成果報告会は葛巻町教育委員会（以下、町教委）の協力の下、例年町役場庁舎の多目的ホールで開催している。また、同時期に、約1週間にわたって庁舎内の廊下に探究学習に関するポスターを掲示し、町民への周知も行っている。さらに、毎月発行される町の広報誌でも、

## 岩手県立葛巻高校レポート



乳製品の調製が印象深いです。家の近くに工場があり、知っていることも多かったのですが、改めて葛巻町の牛や牛乳のことを深く知ることができたからで、たくさんのお菓子が作れること、知る機会にもなり、道路選択を生かせると思います。

さん（久慈市出身）  
多種多様な分野の方の調査を受けたことで、これまで知らなかった世界を知り、将来への期待や自分の可能性も広がったように感じます。  
どの分野の方々も課題を持ち、解決に向けて模索しながら取り組んでいて感動を受けました。

町の特徴であるミルワ・ウィン・グリーンエネルギーについて、今に至るまでの歴史や努力を知ることができました。私が感じ取ったことを葛巻町を知らない人にも伝えたいと思います。

また私の生活が多くの人に支えられていることも気付きました。

広報くずまき・2025（令和7）年1月1日（14）

※葛巻町『広報くずまき』（2025年1月号）を抜粋して掲載。

同校の教育活動を2ページにわたって紹介している(図2)。

そうした学校へのかかわりを今後も維持・拡充してもらうため、同校の教師たちは機会があれば町役場を訪問し、町教委はもちろん、それ以外の部局の職員ともコミュニケーションを取ることを心がけている。

「役場内で異動があっても、『学校のこととはあのにも相談できる』といった関係性をいろいろな人と構築しておけば、教育活動の持続可能性を向上させることができます。本校のことをよく知っている人、本校とかかわったことがある人を、1人でも多く増やしていくことが重要です」(畠山先生)

「葛高ミライノカタチプロジェクト」  
概念図（P.15図1）を作成したのも、  
これまで同校が取り組んできたことを  
言語化することで、同校の教師全員が  
探究学習の目的や3年間の流れについ  
て目線合わせをしやすくし、活動の持  
続可能性を高めるためだ。

「特色化や魅力化を意識しているとい  
うよりは、目の前にいる生徒にこれから  
の社会で求められる資質・能力を育成  
する」とい思いで探究学習をブラッシ  
ュアップしてきました。それを言語化  
したことで、本校の特色や立ち返る軸  
が明確になりましたが、社会や教育環  
境はもちろん、生徒も教師も変化して  
いきます。概念図自体も、そうした変

教育委員会が**考**える

特色化  
魅力化

学びを活性化する環境を守り、  
学校の主体的な取り組みを支援



岩手県は2021年10月、各県立高校が特色・魅力ある学校づくりを主体的に推進できるよう、今後の県立高校のあり方や関係機関と連携した特色ある教育課程の例などを示した「いわての高校魅力化グランドデザイン for 2031（岩手県立高等学校に関するスクール・ミッション）」を策定しました。同グランドデザインでは、高校の特色や魅力を考える3つの枠組みとして、「地域連携」「学術・国際連携」「産学連携」を設定しました。各校はそれらの枠組みを意識した上でスクール・ポリシーを策定し、地元自治体、企業、研究機関などの連携先と協働しながら、研究特色・魅力化を進めてきました。

一方で、生徒数の減少が避けられない中、26年4月には、小・中学生と高校生からの意見聴取や地域での説明会などを経て、「第3期県立高等学校再編計画」を取りまとめました。同計画では、高校教育の質を維持するために、各校1学年20人を超える生徒数は必要とし

た上で、一定の条件を満たす1学年1  
学級の普通高校を「地域校」として位  
置づけ、地域の教育機会を保障する考  
えを示しました。今後、本県内でも小  
規模校は増加していく見通しのため、  
遠隔教育や小規模校間での生徒同士の  
交流などを充実させることで、学びの  
活性化を図っていきたいと考えていま  
す。また、地域産業との連携やICT  
の活用を推進することを通じて多様な  
学びと進路支援の実現を図り、教育の  
質の向上と機会の確保を両立させる方  
針です。

特色化・魅力化は、各校が地域・生徒の状況に応じて主体的に取り組むものであり、教育委員会が果たすべき役割はその後押しであると考えています。既に各校の教育活動の発信の基盤となるウェブサイトの整備は完了し、葛巻高校などで実施してきた県外からの「いわて留学」も、18校が実施するまでになりました。今後も各校の教師や生徒と対話を重ねながら、岩手県としての特色化・魅力化の取り組みを模索していきたいと考えています。

## 本特集を振り返って

各教師・生徒が思う自校の特色・魅力を  
言語化し、共有する

本特集の課題整理において、全国普通科高等学校長会の佐藤<sup>いさお</sup>事務局長が「私はすべての高校に特色・魅力はあると確信しています。だからこそ、まずは学校内で現状を言語化して共有することで、自校の特色や魅力を捉え直すことができます」とおっしゃっていましたが、まさにそれは、長崎県立佐世保南高校の舟越<sup>ふし</sup>裕校長のご実践や3校の事例の共通点の



VIEWnext 編集部  
統括責任者  
柏木 崇

1つであり、本特集の冒頭で提示した「各校は特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのか」という問いを考える上で、大きなヒントになったのではないのでしょうか。自校に特色や魅力が存在するにもかかわらず、それが何なのかは教師や生徒の間で共通認識が図られていなければ、「自校にはこれといった特色や魅力はない。何か新しい取り組みを考えなければ……」といった状況に陥りかねません。そうならないためにも、各教師・生徒が自校の特色・魅力だと思っている点を言語化することが重要であり、そしてそれこそが共通認識を図る手立てであるとともに、特色化・魅力化を進めていく上で中核となるものだと考えます。一案ですが、次のようなステップで自校の特色化・魅力化を推進していくとよいのではないのでしょうか。

- ステップ1** 特色化・魅力化の推進のステップ（本ステップ1～5）について共通理解を図る
- ステップ2** 特色化・魅力化のそれぞれの意味や相互の関係の理解（P.5図1・2）を学校全体で図る
- ステップ3** 自校の最上位目標、育てたい生徒像を確認する
- ステップ4** 自校の現状について、特色化の度合いと魅力化の状況の2軸による4象限のマトリクスで整理する（P.6図3）
- ステップ5** ステップ4を踏まえて、地域や外部とも連携・対話をしながら、取り組みの改善や新しい取り組みの検討をする

特色化・魅力化の解釈がぶれていると、自校の魅力・特色を言語化できたとしても共通認識が図れたとは言えないため、早い段階でその点は確認しておきたいところです（ステップ2）。また、ステップ5の取り組みの改善や新しい取り組みの検討が「生徒を主語にした」ものになるように必ず立ち返るべきなのが、スクール・ポリシーや育てたい生徒像などの最上位目標であり、その点も早い段階で確認しておきたいことから、ステップ3に配置しました。

言語化の過程で行われる教師間の対話では、教師一人ひとりが安心して話せる環境づくりが求められます。他者の発言・提案を否定・評価せず、挑戦することを歓迎する姿勢を、管理職の先生が率先して見せていくことが重要ではないのでしょうか。

化を踏まえて改善していくものだと思います」（一ノ渡先生）

こうした探究学習を継続してきた結果、自ら探究学習のテーマを設定し、楽しく、主体的に取り組む生徒が増えてきた。大学入試や就職活動における採用選考の面接において、高校時代の探究学習の経験を語る際には、多くの生徒が成果ではなく、町の人たちと協働した経験、すなわちプロセスを語っている。

生徒の言葉で探究学習を発信する場合は、日常的にも設けられている。

「約60校の岩手県立高校は岩手県教育委員会のウェブサイトを通じて、自校の教育活動を発信しています。本校も探究学習の進捗や寮生活の様子などを発信していますが、記事の4割程度は生徒や卒業生が執筆しています。教師による記事のチェックは最低限にと

どめ、できるだけ生徒自身の言葉で、生徒が感じている本校の魅力を全国に伝えるようにしています」（畠山先生）

近年、葛巻町の中学校を卒業した生徒の7割程度が葛巻高校に進学している。同校以外の高校に進学する場合、

その多くは、部活動を理由とする都市部の私立高校への進学だ。葛巻高校では26年度も「物理」や「情報」で遠隔授業を実施し、生徒が専門的な指導を受けられる体制を継続。国公立大学への進学から就職まで、多様な進路を実現する同校の教育活動は地域の生徒や保護者に評価され、選ばれる高校となっている。

山村留学開始から10年以上が経過した現在、関東や関西の大学に進学した県外出身の生徒たちが、社会人になって葛巻町に戻ってきているという。

「葛巻高校と葛巻町が、自分が成長した場所、豊かな人間関係が築かれた場所であることから、彼らは葛巻町に戻ってきているのだと思います。生徒の人生の可能性を広げているという点で、本校は町とともに、生徒に対して

魅力を発揮できているのだと考えています。今後も地域とつながり、探究学習の目的に常に立ち返ることで、教師間の熱量を学校全体のものとしながら、生徒の成長のための取り組みの深化を町とともに図っていききたいと思っています」（菊地校長）

# 指導変革の軌跡

No. 301

教師たちの創意工夫や挑戦  
そして改革への情熱を描く

## 進路指導改革

## 生徒が自己のあり方・生き方に 向き合える進路指導に転換

## 富山県立高岡高校

### 1分で分かる軌跡

富山県立高岡高校は、将来就きたい職業や志望校を軸とした進

路指導を転換。進路行事を見直すとともに、課外活動への参加を促し、社会を知ることによって生徒のキャリア観を広げる取り組みを2025年度から推進している。生徒は多様な刺激が得られる課外活動に価値を見いだし、2年次4月までに半数以上の生徒が参加。それらは生徒にとって自己のあり方・生き方を考える機会となり、「もっと学びたい」といった思いが芽生えたことで、難関国立大学志望者が増加している。

#進路指導の転換 #進路行事の大幅な見直し

### 変革の背景

職業・大学ありきの進路選択に、  
教師が疑問を抱くように

難関国立大学や医歯薬学系学部・学科を志望する生徒が多い富山県立高岡高校では、それらの希望進路を実現するための進路指導が1年次から行われてきた。将来就きたい職業や志望大学・学部を明確にし、その希望進路の実現に向けて学習にまい進させるといったのがこれまでの指導の基本方針だった。しかし、社会の変化が激しい現代において従来の進路指導のままでよいのかといった思いが徐々に生じていったと、進路指導部副主任の川腰達也先生は語る。「文理選択においても、医師になりたいから理系、国家公務員や弁護士になりたいから文系というように、自分が

知っている職業が選択の軸になっていました。しかし、生徒が知っている職業は限られます。社会の変化に合わせて広い視野で自分の将来を主体的に考えてほしいと思うようになりました」

同校は「ふるさとに誇りと愛着を持ったグローバルリーダー」を育成すべく、「新たな時代に対応し、未来を切りひらく人間力」の伸長を教育目標として掲げている。それに鑑みても進路指導を見直す時が来ていたと、人文社会科学科主任の阿尾圭悟先生は語る。

「先行きが見通しにくい時代においてキャリア形成の軸となるのは『自分は何が得意で、何に価値を見いだし、どのように社会にかかわりたいのか』といった、個人の譲れない価値観や能力です。大学・学部選択の手前にある自己理解に、生徒がしっかり取り組めるようにしたいと考えるようになりました」

### 変革の一手

キャリア観を広げるため、  
課外活動の参加を促す

そうした思いの下、2025年度の1年次の進路指導は、志望大学・学部を決定することよりも、生徒が社会を広く知することに重点を置くことにした。25年度入学生の学年主任を1年次から務める中野亜紀子先生はこう説明する。「以前は入学直後から、『東京大学や京都大学、医学科に合格するためには1年生では平日3時間、休日5時間の家庭学習が必要だ』といったことを繰り返し伝えていました。その方針を転換し、学年集会などで具体的な大学名や職業名を挙げることはせず、生徒が特定の大学や職業にとらわれないようにすることを目指しました。生徒には

#### 学校概要

設立 1898 (明治 31) 年

形態 全日制／普通科、探究科学科(理数科学科・人文社会科学科)／共学

生徒数 1学年約 240 人

2025 年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、東京科学大、東京大、富山大、金沢大、京都大、大阪大、九州大などに181 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ 475 人が合格。



校長  
**亀谷卓朗**  
かめたに・たくろう  
同校に赴任して2年目。



進路指導主事  
**山本祐子**  
やまもと・さちこ  
同校に赴任して14年目。  
英語科。



企画研究部主任  
**北美知代**  
きた・みちよ  
同校に赴任して14年目。  
地歴公民科（公民）。



進路指導部副主任  
**川腰達也**  
かわこし・たつや  
同校に赴任して10年目。  
地歴公民科（日本史）。



企画研究部  
人文社会科学科主任  
**阿尾圭悟**  
あお・けいこ  
同校に赴任して10年目。  
国語科。



2学年主任  
**中野亜紀子**  
なかの・あきこ  
同校に赴任して4年目。  
英語科。

『社会を知って、将来を考えるきっかけにしよう』と呼びかけ、年1回以上の課外活動への参加を促しました」

進路行事も見直した。例年9月に行っていた予備校の講師などによる進路講演会は6月に前倒しし、大学入試制度などへの理解を深めるといったそれまでの内容も変更。東京大学の天文学の研究者に、学問や社会と自身のつながりをテーマに語ってもらった。

さらに7月の職業理解講座を「キャリアプランニング講座」に刷新。従来は弁護士や医師など、各分野で活躍している卒業生約10人を迎え、生徒は自分が興味・関心を持っている分野を2つ選び、少人数で話を聞く形だった。それにより、選んだ分野への理解が深まる一方で、話が聞ける分野は限られるため、生徒の視野を十分に広げられているとは言いが難かった。そこで新たな講座は、キャリアを豊富に積みつつ、今後の人生設計についても語れる30〜40代で、経歴の異なる卒業生3人にキャリア形成の経緯や考え方を語ってもらい、生徒

全員が聞く形にした。講座を企画した川腰先生は人選にこだわったと語る。

「本校では女子生徒の半数が理系を選ぶものの、理工学系学部に進学する生徒はわずかです。そこで理系の職業をイメージできるように、東京大学を卒業後、製造業の開発職に就いた女性に講師を依頼しました。さらに、マルチステージの働き方のモデルとして、京都大学を卒業してから東京で複数の職業を経験した後、富山県にUターンした女性と、一方で1つの仕事を続けるモデルとして、富山大学薬学部を卒業後、地元の病院に勤務する男性薬剤師にも講師をお願いしました。生徒がキャリア観の多様さに気づくよう、自身のキャリアの選択について率直に語ってほしいと3人に伝えたところ、3人とも趣旨に共感し、依頼を快諾してくれました」

### 進路指導部の賛同を得て、 進路行事を変更

「進路行事を変更したい」という中野

先生と川腰先生からの提案に、進路指導主事の山本祐子先生は賛同した。

「医師や薬剤師を目指す生徒に理由を聞くと、大半が『人を救いたい』『人の役に立ちたい』と言います。その志は法律や福祉などの仕事でも実現できるはずですが、ほかの職業に目が向かない生徒に以前からもどかしさを感じていました。進路行事の刷新は生徒のキャリア観を広げる好機になると考え、進路指導部として了承しました」

校内の手続きとして、管理職と各分掌部長、各学年主任から成る「校務運営委員会」に進路行事の変更を提案すると、「今まで通り、生徒が志望する医師や弁護士などの職業に就いている卒業生を招く方がよいのではないか」「1年生全員が一斉に話を聞く形では、職業への理解が深まらないのではないかなどと、変更の効果を疑問視する声が少なからず出た。それに対して中野先生と山本先生は、社会の状況を踏まえると生徒がキャリア観を広げることが重要であると丁寧に説明したところ、

先行きが見通しにくい時代だからこそ、  
進路選択の手前にある**自己理解**に向き合わせたい

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

## 図 2025年度1年次の進路指導

教師の  
思い

職業・大学ありきの進路選択ではなく、自分の興味・関心や得意をどのように社会に生かせるか、社会にどう貢献できるかという視点で自己のあり方・生き方を考えてから進路選択をしてほしい。

|         |                   |                                                                                 |
|---------|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 新しい取り組み | 課外活動の年1回以上の参加     | 学校に届いたワークショップやボランティア、コンテストなどの情報は必ず生徒に告知。Google クラウドにも情報をアップし、生徒がいつでも閲覧できるようにした。 |
|         | 課外活動参加報告会の実施      | 1年次12月と2年次4月に、課外活動に参加した生徒が活動内容や学んだことなどを発表。                                      |
|         | 他県の高校生と模擬試験の振り返り会 | 国語・数学・英語の模擬試験の振り返りを、京都市立堀川高校の生徒とオンラインで実施。例えば数学は、再現答案をそれぞれで採点し、採点の観点を出し合った。      |

|          |   |              |                                                                             |
|----------|---|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 見直した取り組み | 旧 | 進路講演会        | 9月に、予備校の講師などによる大学入試の制度や心構えなどに関する講演を実施。                                      |
|          | 新 | 進路講演会        | 6月に、東京大学の天文学の研究者が自身の研究内容に加え、学問や社会と自身とのつながりをテーマに語った。                         |
|          | 旧 | 職業理解講座       | 医師や弁護士、公務員、金融、IT、エンジニアなど、各分野で活躍する卒業生が、仕事内容ややりがいなどを語る。生徒約20人のグループで、講師と生徒が対話。 |
|          | 新 | キャリアプランニング講座 | 経歴が異なる3人の卒業生が、高校・大学時代から現在の職業までの道のりや、自身の人生観・キャリア観を語った。                       |

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

最終的に進路行事の変更は承認された。そうして実施されたキャリアアップランニング講座では、前述の講師3人が高校時代から今までの道のりをそれぞれ語った。質疑応答では、「高校生や大学生の時に今の道に進むと思っていたか」「今の生き方を決めた瞬間はあったのか」といった質問が生徒から上がった。「Uターンした女性は『大学の時点では今の仕事は想像もしていなかった』と明かし、開発職の女性は『今の仕事は楽しくてやりがいもあるが、これだと思える仕事にはまだ出会えていない』と率直に語ってくれました。一方で薬

剤師の男性は『薬剤師になると決めて薬学科に進学し、今がある』と答えていました。そのように、キャリアの形成は三者三様でしたが、生徒にとっても教師にとっても、キャリア観を深く考える機会となりました（中野先生）。生徒の感想には「様々なことに興味があるのなら、必ず正社員にならなければいけないということではなく、途中でキャリアの方向性を変えながら、より自分らしい道を模索してもよいのだと気がついた」「将来、何になりたいのか分からないからこそ、選択の幅を広げるために勉強を頑張ろうと思った。

## 卒業生が語ったキャリア観は、生徒が自己のあり方・生き方を考える出発点となった

夏休みに自分が興味を持てるものを探したい」といった声が見られた。「同講座は生徒が自己のあり方・生き方を模索していく出発点になったと捉えています」（川腰先生）

### 他校の生徒との交流や課外活動の報告が大きな刺激に

課外活動の中でも生徒が大きな刺激を受けるのが、他校の生徒との交流だ。例えば25年度に、愛知県立旭丘高校主催の「グローバルサマーフェスタ」に参加した1年生4人の様子を、企画研究部主任の北美知代先生はこう語る。「東海地方のSGH（※1）の高校が集まる同フェスタに、指定校だった本校も16年度から参加しています。本校とは環境が異なる他校の生徒とともに「グローバルリーダーとは何か」という問いを考える活動を通じて、生徒は多様な視点を得ます。今年度は、フェスタで刺激を受けた生徒が『日本の次世代

リーダー養成塾（※2）などに参加し、さらに見聞を広げようとしています」さらに新たな試みとして、京都府・京都市立堀川高校とオンラインで模擬試験の振り返り会を25年12月と26年3月に実施した。国語・数学・英語で行い、例えば数学では、再現答案をそれぞれで採点し、採点の観点を出し合った。「1回目に参加した10人の生徒全員が2回目も参加しました。生徒主体で学び方を学ぶ活動に取り組む堀川高校の生徒（※3）は、同じ問題でも多様なアプローチで解法を考え、自分の課題を明確に言語化していました。本校の生徒はその姿に自分との力の差を感じ、伸ばすべき力を自分なりに考えたようでした」（川腰先生）。校内でも生徒同士で刺激し合えるように、自分が参加した課外活動について発表する「課外活動参加報告会」を25年12月と2年次の26年4月に実施した。各回とも30〜40人の生徒が自身の経験を語った。報告会後に実施したア

※1 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」。高岡高校は2014〜18年度に指定校だった。

※2 自治体と経済界が連携し、全国の志の高い高校生約150人を対象に、日本や世界を舞台に挑戦する人材の育成を目指したサマースクール。

※3 堀川高校が行う、生徒主体で学び方を学ぶ活動「学びのアセスメント」については、本誌2022年10月号の特集「高大接続の視点で見通す2025年度大学入試」で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」([https://cdn.view-next.benesse.jp/view\\_section/bkn-hs/article12772/](https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article12772/))、または右の2次元コードからアクセスしてください。



## 変革の軌跡を振り返って



経験が浅いからこそ学年団で目線を  
合わせ、**同じスタンス**で生徒を支援

中野先生

本校赴任4年目の私は、周りの先生方と相談しながら学年主任を務めてきました。進路指導の転換については反対意見も出ましたが、生徒に一番近い学年団が捉えた生徒の姿と私たちの思いとのギャップを率直に話し、進路指導部を含め、最終的には校内の合意を得られました。改革は進行中ですが、英語ディベート大会での完敗をバネ

に次の大会に向けて早くから自主練習に励んだり、「トビタテ！ 留学JAPAN」に多くの生徒が挑戦したりするなど、その意欲的な姿に確かな手応えを感じています。そうした生徒を2年次にどのように伸ばしていくか。学年団でコミュニケーションを取る中で、私と同じく本校の赴任歴が浅い先生方が指導の進め方に苦慮していることが分かりました。週1回行う学年団の定例会は日々の業務の話が中心になりがちなので、2年次進級時に指導の目線合わせをする場を設け、本校での指導経験が豊富な川腰先生に指導の留意点を語ってもらいま

した。また、生徒に高い志を持つてほしいという願いや、3年次までに生徒に志望大学・学部を決めさせなければならないという焦りから、面談などで職業や大学ありきの声かけにならないようにすること、そして志望大学・学部は決定後も変えてもよいというスタンスをいま一度確認し合いました。課外活動は書類の準備などで教師にかかる負担もありますが、生徒が審査を通じて海外に留学したり、大会に入賞したりすると、それは大きな喜びに変わります。生徒がキャリアアビジョンを着実に描けるよう、新たな進路指導に磨きをかけていきます。

## 変革の成果と展望

### 学年団の改革を 学校全体の改革につなげる

26年度の2年次4月時点で、それまでに課外活動に参加したことがある生徒は5割を超えた。部活動などもある中で、複数回参加する生徒も少なくな

ンケートには「課外活動は普段かかわることがない人たちと交流でき、視野が広がると分かった」「一歩踏み出してみようと思った」といった感想が寄せられ、「今後も課外活動に参加したい」という回答は9割に上った。

い。一方で、全く参加しない生徒もいるが、「参加したいという気持ちがない」「参加する意味はない」と、無理に参加する必要はないことを伝えている。2年次の目標は年度末に行う「キャリアアビジョン宣言」だ。従来の志望理由書の作成に代わって、将来の自分がありたい姿とその実現のために目指す大学・学部、その大学・学部の合格に必要な学習戦略について、2〜3月に書き表すことを生徒に説明し、「漠然とした状態でもよいから、自分自身に向き合って考えよう」と伝えた。そして学年団では、「志望大学・学部の決定は急かさず、1年次に引き続き、生徒が自己のあり方・生き方を考えられるように寄

り添う」という方針を改めて確認した。今後は現2学年団の進路指導改革（図）を全校へ広げていく考えであり、26年度の1年次も「キャリアアプランニング講座」の実施を計画中だ。進路指導と探究活動との連携も検討している。「ここ数年、探究活動の進め方を見直したことで、生徒が自身の興味・関心や社会課題に深く向き合えるようになってきました。そうなる生徒は、自己のあり方・生き方を見いだしていきます。そのように、探究活動がキャリアアビジョンにつながるような働きかけをもっとしていきたいと考えています」（阿尾先生）

生徒の主体性の向上は希望進路にも表れ始めている。「教師が特に大学名を言わなくても、様々な刺激を受けて意欲的になった生徒は、おのずと高い目標を意識するようになりま。結果として、2年生の難関国立大学の志望者は例年以上のペースで自発的に増えています」（川腰先生）同校の学校づくりについて亀谷卓朗校長は次のように語る。「若手教師が増える中、指導が着実に継承されるよう、各学年の副主任を進路指導部の配属とする組織改革を行いました。各学年の挑戦を次の学年が引き継ぎ、さらに磨きをかける。その積み重ねを通じ、学校全体でグローバルリーダーを育てていきたいと思っています」

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

Web VIEWnext ONLINE

関連記事はこちら！

今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。

2023年8月号 指導変革の軌跡 宮城県・私立仙台北城南高校

▶ [https://cdn.view-next.benesse.jp/view\\_section/bkn-hs/article16617/](https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article16617/)



## 高×大専社 接続の視点で考える

社会の変化に対応する人材の育成に向けて、大学や専門学校では新たな教育プログラムや入試改革が進んでいる。本コーナーでは、今後の教育において重要なキーワードについて、高校と大学・専門学校・社会の接続の視点で考えていく。

### キーワード

# 産学連携

## 高校においても高まる、民間企業などの連携の重要性

教育・研究機関と民間企業が協力し、教育活動や共同研究などを行う産学連携が高校教育においても広がっている。

高校における産学連携の拡充の背景にあるのが、現行の学習指導要領で新設された総合的な探究の時間だ。総合的な探究の時間において社会課題を探究のテーマとする生徒が、民間企業や自治体、大学などの外部の専門家のサポートを受けるケースが近年増加している。ベネッセ教育総合研究所の調査（\*1）によると、総合的な探究の時間や学校設定科目における探究活動の中で生徒が「学校外の専門家・研究者から指導を受ける」活動を行っている高校は、2023年度で72.7%に上っている。

産学連携の重要性が特に高まっているのが専門高校だ。少子高齢化とデジタル需要の拡大によって深刻さを増すデ

ジタル人材の不足に対応するため、文部科学省は21年度から25年度にわたって「次世代地域産業人育成刷新事業」を推進。最先端の職業人材の育成に向けた取り組みを地域企業と一体となつて行う専門高校を「マイスター・ハイスクール」に指定し、民間企業や自治体などの連携を後押ししてきた。

そして26年2月に文部科学省が公表した「高校教育改革に関する基本方針（ブランドデザイン）〜2040年に向けた『NEXT（ネクスト）ハイスクール構想』〜」においても、高校教育改革の柱の1つとして、Aやデジタル技術を駆使しながら地域産業を支え、社会の課題を解決できる人材や、地域発のイノベーションを興すことができる人材、いわゆる「アドバンスト・エッセンシャルワーカー」の育成が掲げられた。今後、

図1 産業界・地方自治体等と専門高校の連携・協働体制構築・強化

- ①産業界のニーズに対応した学科・コースの設置、学校設定教科・科目等の開設
- ②教育委員会と知事部局等の連携・協働や、コーディネート人材を中心とする高校と産業界の持続可能な連携・協働体制の構築
- ③産業界の技術者を外部講師として招聘<sup>しょうへい</sup>して授業を実施
- ④地元産業界等の協力による長期インターンシップ、生徒が現場の一員として業務に取り組むデュアルシステムなどの実践
- ⑤課外講座等を活用した実社会で役立つ高度な資格取得に向けた取り組み
- ⑥高等教育機関等と連携・協働し、進学も見据えた高度専門職人材の育成

※文部科学省「高等学校教育改革促進基金の創設～N-E.X.T.（ネクスト）ハイスクール構想～」を基に編集部で作成。

地域の産業界や大学、自治体などと連携・協働して、教育課程の刷新・開発や先端分野の専門的な指導などを通じて地域産業を支える人材の育成が、パイロットケースとして先導的な学びのあり方を構築する高校において進められることになる（図1）。

産学連携を踏まえたカリキュラム改革や授業改善は、普通科高校でも専門

高校でも今後ますます求められることになると考えられる。次ページからは、地域の企業などと強固に連携し、未来を拓く1人1人材の育成などに取り組む事例を紹介する。

\*1 ベネッセ教育総合研究所「小中高校の学習指導に関する調査2023」。

# 建学の精神「産学一体」の下、 生徒の未来につながる教育活動を展開

静岡県・私立静岡清高校

## IT関連の科目や スポーツ科学の科目を開講

「産学一体」を建学の精神とする静岡県・私立静岡清高校では、生徒の夢の実現や目標の達成を支援する学習プログラム「未来の教室」を全校規模で展開している。ITエキスパートコース、総合工学コース、スポーツエキスパートコースの3コースを擁する工学探究科では、企業などの協力を得て、実践的な実習・実技を実施し、変化の激しい社会で活躍し続けられる人材の育成に取り組んでいる。

ITエキスパートコースの「未来の教室」では、IT企業である株式会社システムシェアードと連携し、最先端技術を体系的に学ぶIT人材育成プログラムを構築し、IT業界で活躍できるデジタル人材を育成している（P.24囲み）。

同コースにおける授業の割合は普通科目が約7割、IT関連の専門科目が約3割。そのうち、専門科目の中核に位置づけられる「IT基礎」「IT応用」「工

業技術基礎」などの科目で、システムシェアードとの提携授業を行っている。提携授業の内容は、同校の教師が同社の担当者と話し合いながら決めていったという。

「工学探究科長の鈴木真人先生を始めとする担当教師がシステムシェアードを訪問し、生徒が学習する内容を事前に受講した上で、企業側と意見交換をしました。決して外部に丸投げにならないよう、本校の教師が『何のために、どのように学ぶのか』を自分の言葉で生徒に説明できるようにすることが大切だと考えました」（小関直樹校長）

同コースで「未来の教室」の取り組みが始まって約5年が経過した現在、システムシェアードから同校の生徒の状況を聞いた企業が求人を出すまでになった。また、同コースに関心を持つている中学生やその保護者を対象にした説明会などで、同社の担当者がIT業界の実態や同コースのカリキュラムについて説明することもあるという。



写真 株式会社システムシェアードが運営する「東京ITスクール」の講師によるプログラミング学習の様子。

実践力と発想力を備えたエンジニアの育成を目指す総合工学コースでは、

「未来の教室」では、地元企業と連携した「ワークプラクティス」を2年次に実施している。4月から6月までに企業説明会や適性検査、個別面談などを行った上で、9月から2月までの期間の毎週水曜日を職場体験学習の日として、生徒1人あたり2社から4社程度、1社につき3日または6日のインターンシップを経験する。そして、3月には生徒が事前学習やインターンシップでの学びを基に企業研究発表を行う。

「高校卒業後の3年離職率が全国平均で約38%に達する中、地元企業と生徒の



校長  
小関直樹  
おせき・なおき  
同校に赴任して6年目。



主幹教諭  
菅藤徹也  
かんとう・てつや  
同校に赴任して15年目。保健体育科。



進路指導課長、工学探究科長  
鈴木真人  
すずき・まさひと  
同校に赴任して15年目。工業科。

### 学校概要

設立 1941（昭和16）年  
形態 全日制・通信制／文理探究科・工学探究科（全日制）／共学（一部のコースは男子のみ）  
生徒数（全日制） 1学年約2000人  
2025年度卒業生進路実績 4年制大は、亜細亜大、専修大、拓殖大、日本大、明治大、立正大、静岡産業大、静岡理工科大、常葉大、愛知大、中京大などに延べ60人が合格。短大・専門学校進学53人。就職111人。

ミスマッチを防ぎたいという思いから、静岡県中小企業家同友会の会員企業や藤枝商工会議所などの協力を得てワークプラクティスが始まりました。企業選択における生徒の視野を広げるため、約50社もの企業にインターンシップ先として協力してもらっています。生徒は地元企業の業務内容や社風を自分で確認した上で3年次の7月から就職活動

## 生徒の成長を定点観測し、 学校とともに教育活動を更新する

株式会社システムシェアード  
専務取締役 室井 明 氏



株式会社システムシェアードが運営する「東京ITスクール」は、静清高校の工学探究科ITエキスパートコースで、専門学校レベルの知識や技術を卒業までに身につける実践的な授業を行っています。同校との連携に先立ち、私は1週間職員室に机を置かせてもらい、先生方とコミュニケーションを取りました。同校にはどんな先生がいるのか、同校ではどのように物事が決まるのかが分からないと、真の連携は不可能であり、私たちが提供する教育プログラムが単なる押しつけになってしまうと考えたからです。先生方とIT業界のことや今の高校生のことなど、様々な話題について語り合う中で、先生方は私のことを受け入れていてくださいました。提携授業が始まって5年目になりますが、1つの学校で高校生の成長を定点観測できることは、私たちの業界にとっても大きな価値があると思っています。先生方から生徒の様子をアセスメントの結果とともに共有してもらいながら、活動をさらにブラッシュアップしていきたいと考えています。

に入りますが、近年は総合工学コースの生徒の約40%がインターンシップを体験した企業に就職しています」（工学探究科長・鈴木真人先生）

スポーツエキスパートコースの「未来の教室」では、医師や理学療法士、鍼灸師などの資格を持つスポーツ医科学の専門家と連携し、最新の研究成果などの科学的根拠に基づいたスポーツ科学やトレーニング理論などを生徒は学んでいる。

「スポーツエキスパートコースで学ぶのは、将来スポーツ分野で活躍したいと考えている生徒たちです。高校時代にスポーツに打ち込むことに加えて、スポーツを科学的に捉える力を身につけるこ

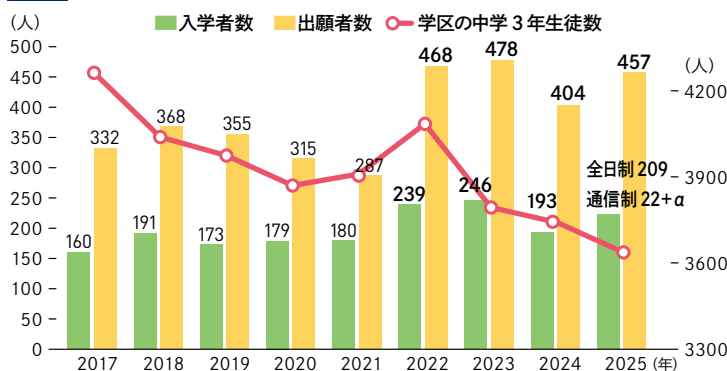
とで、今後の超高齢社会で他者の健康や幸福に貢献できる人材に育ってもらえたらと考えました。私たち教師が外部の専門家に生徒の興味・関心や生徒が持つ科学的知見のレベルを伝えることで、生徒の実態に合った授業づくりができています」（主幹教諭・菅藤徹也先生）

### アセスメントで把握した 「生徒の強み」を外部にも共有

生徒の夢の実現や目標の達成のためには、学校の中の資源だけを使って生徒を支援するのではなく、企業などの連携が不可欠であると小関校長は語る。

「産学連携によって、これまでの学校

図2 近年の出願者数・入学者数・学区の中学3年生徒数の推移



※学校資料を基に編集部で作成。

ではできなかった活動ができるようになります。次の一歩として、活動によって育まれた資質・能力や今後さらに伸ばしたい力などを客観的なツールで評価し、外部と共有しながら活動内容の改善につなげようと考えました」

そこで同校は、生徒の資質・能力を客観的に測るために、26年度から「GPS-Academic（※2）」を3学年で導入した。

「『GPS-Academic』の受検結果を分析することで、教科学力には課題がある一方で、創造的思考に秀でている生徒や高い自主性を身につけている生徒がい

ることが分かりました。普段の授業で教師が十分に見取ることができていなかった生徒の資質・能力を把握できたことは大きな成果ですし、そうした生徒把握を学年・コース、さらには部活動単位で集約し、『未来の教室』における連携先とも共有することで、外部の方々の生徒へのかかわりもよりよいものになると考えています」（小関校長）

「産学一体」による教育活動の充実地域の中学生や保護者にも周知されている。同校の通学区域の中学3年生徒数が減少する中でも、出願者数、入学者数のいずれも近年は増加傾向にある（図2）。高校入試に向けた学校説明会には、300人の定員に対して800人近い参加申し込みがあったという。

「私は本校の先生方に対して、『GPS-Academic』を明らかにした生徒の強みは、何1つ疑う必要がなく、すべてのみにしようとお話しています。教科のテストでは測れない生徒のよさに、私たち教師や外部の方々など、生徒を取り巻く大人たちが気づき、それをさらに伸ばしていこうとすることで、生徒一人ひとりが輝ける『未来の教室』が実現するのだと私は考えています」（小関校長）

※2 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

## 産学連携を基にしたカリキュラム開発で 生徒を未来へ導く

本コーナーでは、「高×大・専・社接続の視点で考える」と題し、シリーズで連載しています。今回は高校と社会の接続、中でも高校における産学連携に着目しました。

学校事例としてご紹介した静清高校は専門学科を有する私立高校です。同校は工学探究科を中心に、企業や商工会議所などの外部機関と連携することで、教育活動のバージョンアップを実現しています。産学連携は、生徒の学びをより実践的なものにするだけではなく、教師にとっても大きな意義があります。教師自身が最先端の技術や社会のリアルな動向に触れることで学びを深め、指導の質を向上させる機会となっているのです。何より、学校単独では実現が困難だった様々な活動を可能にした点は特筆すべきでしょう。

全国の高校の専門学科の各学科数は、ピーク期の1970（昭和45）年度では、商業科1,201学科、家庭科955学科、工業科715学科、農業科679学科でしたが、2024（令和6）年度には、商業科574学科（対1970年度比48%）、家庭科259学科（同27%）、工業科516学科（同72%）、農業科296学科（同44%）と大きく減少しています（図3）。そのような中でも減少が比較的緩やかな工業科では、時代の要請に応えるべく、静清高校のように学科内のコース編成を改革するなどの取り組みが行われてきました。産学連携はそうした改革

（株）ベネッセコーポレーション  
学校カンパニー 教育情報センター長  
**渡辺健太** わたなべ けんた

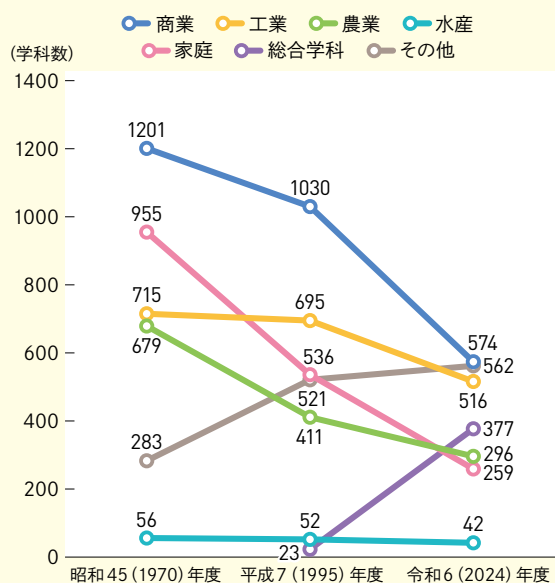


の鍵となっており、各コースならではの特色ある科目などは、地域の中学生や保護者に自校をアピールする材料にもなっています。

また、普通科、専門学科ともに、育成を目指す資質・能力の定義と、その評価方法について検討を進める学校が増えています。そうした「育てたい生徒像」を外部の連携先とも共有し、客観的なデータを基にカリキュラムを共創する姿勢にも、産学連携を円滑に進めるヒントがあるのではないのでしょうか。

少子化という逆風の中、安易な統廃合論に流されるのではなく、自校の歴史や地域との絆を大切にしながら、いかに「地域になくてはならない魅力的な拠点」へと学校を進化させ続けられるかが求められています。産学連携を通じて学校の扉を開き、社会とつながることは、その学校にしか出せない独自の価値を創出することにはなりません。自校の価値を再定義し、未来を担う生徒たちにとって誇りある場所であり続けるための各校の挑戦を、これからも注目していきたいと思います。

図3 高校の主な専門学科及び総合学科の学科数の推移



学科別の高校数（2024年度）

|             |      | 国立  | 公立    | 私立    | 合計    | 割合    |      |
|-------------|------|-----|-------|-------|-------|-------|------|
| 普通          |      | 11  | 2,383 | 1,284 | 3,678 | 56.4% |      |
| 専門教育を主とする学科 | 専門高校 | 1   | 1,486 | 419   | 1,906 | 29.2% |      |
|             |      | 農業  | 293   | 3     | 296   | 4.5%  |      |
|             |      | 工業  | 1     | 431   | 84    | 516   | 7.9% |
|             |      | 商業  | 440   | 134   | 574   | 8.8%  |      |
|             |      | 水産  | 42    |       | 42    | 0.6%  |      |
|             |      | 家庭  | 168   | 91    | 259   | 4.0%  |      |
|             |      | 看護  | 29    | 68    | 97    | 1.5%  |      |
|             |      | 情報  | 23    | 5     | 28    | 0.4%  |      |
|             |      | 福祉  | 60    | 34    | 94    | 1.4%  |      |
|             |      | その他 | 1     | 443   | 118   | 562   | 8.6% |
| 総合学科        |      | 2   | 353   | 22    | 377   | 5.8%  |      |
| 合計          |      | 15  | 4,665 | 1,843 | 6,523 | 100%  |      |

※「その他」の学科は、専門教育を主とする学科のうち「農業」～「福祉」に関する学科以外の学科（理数、体育、音楽、美術、外国語、国際関係など）の合計 ※1つの学校が2つ以上の学科を持つ場合は、それぞれの学科について重複して計上。

※文部科学省「専門高校に関する参考資料集」を基に編集部で作成。

# ウェブ連載記事 ダイジェスト

ウェブサイト『VIEW next ONLINE』で連載していた授業実践に関するコーナーを2026年7月よりリニューアルするとともに、教育課程に関するコーナーを新設しました。本コーナーでは、それらを含むウェブ連載記事の概要をお伝えします。

各記事の全編には、2次元コードからアクセスするか、<https://view-next.benesse.jp/> にアクセスし、「学校教育情報誌『VIEW next』」>「ウェブオリジナル記事」からご覧ください。

📖 学校教育情報誌『VIEW next』

高校管理職・教師向けお勧めテーマ

小・中学校 教育委員会向けお勧めテーマ

▶ 高校版バックナンバー ▶ 教育委員会版バックナンバー ▶ **ウェブオリジナル記事 クリック!**

生徒は必ずしも英語が得意であるとは限らない。そのため田中先生は「英語を知ること、日々の生活が少し面白くなったら素敵だよ」と、生徒に伝えている。物事の見方・考え方が一歩深まり、日常を豊かにする教養としての英語力を習得してほしい、さらには自身のカナダ留学の経験から、世界の文化や価値観を理解し、様々な人々と対話をするためにも英語を学んでほしいと考えている。

| STEP | Small Goal                                              | 達成度 | 振り返り | 気づき                                                               | 学び                                          |
|------|---------------------------------------------------------|-----|------|-------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 1    | SNS上の情報に対する自分の判断基準を整理し、他者との比較を通じて自分の考えを整理することができた。      | 6/5 | 6/5  | 「expired」…期限切れ<br>「ingredients」…材料<br>「disgusting」…とんでもない         | 「大塚先生」の記事が自分の意見と一致した。                       |
| 2    | 本記事の授業実践を通して、情報に対するプロセスを整理し、他者との比較を通じて自分の考えを整理することができた。 | 6/5 | 6/5  | 「大塚先生」の記事が自分の意見と一致した。また、大塚先生の記事が自分の意見と一致した。また、大塚先生の記事が自分の意見と一致した。 | 「大塚先生」の記事が自分の意見と一致した。また、大塚先生の記事が自分の意見と一致した。 |

**写真** ラーニングマップの表面には各STEPの学びを記録する。まずは各STEPに取り組む計画を立てる。そしてSTEPが終わる度に「新たに分かったこと」「つまづいたこと・難しかったこと」「他者との比較で変わったこと」を記入し、達成度を3段階で自己評価する。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。



学習計画をラーニングマップに記入してから学習を開始。各STEPの終了時には、難しかった点などを、全STEP終了後には、Lesson前後での自身の変化や次のLessonで意識したいことなどをラーニングマップに記入する。

ワークシートには、生徒が物事を深く考え、他者との対話が生じるような工夫を施している。例えば「Media Literacy」のLessonでは、「SNSで見た情報を私たちがどのように判断し、どのように扱うべきだろうか」をBig Questionとして設定。生徒はその答えを英語で書くという最後のSTEPに向けて、各STEPでは自分の考えを論理的に組み立てることに取り組む。その際、生徒間で対話が生じるよう、各STEPの問いは生徒の意見が分かれるようなものになっている。

本記事の全編では、授業の進め方の詳細とともに、ワークシートやラーニングマップの作り方、授業中の教師の声かけの工夫、ラーニングマップを基にした「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法などについても紹介している。



たなか・たいせい  
同校に赴任して7年目。  
英語科主任。3学年担任。

「主体的・対話的で  
深い学び」を  
実装する  
**授業デザイン**  
英語

自己調整しながら学ぶ授業を  
通じて、生徒に対話力や  
自己表現力を育む

静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校

田中大成 たいせい

「主体的・対話的で  
深い学び」を  
実装する  
授業デザイン

数学

「なぜ、そうなるのか」と  
考えたくなる「問い」を  
生徒に投げかけ続ける

長崎県立大村高校 川久保晃一

教科書の内容を生かし、「なぜ、そうなるのか」を探究

「自ら気づき、考え、行動できる能力や課題解決のための実践力を身につけ、地域や社会の一員として活躍する人材を育成」することをスクール・ミッションに掲げる長崎県立大村高校。授業では、教師が生徒に与えた問題を解かせるだけではなく、「なぜ、そうなるのか」「この場合はどうなるのか」「学んだことはどのようなことに役立てられそうか」といった、生徒が考えなくなる問いを教師が投げかけるなど、学校を挙げて授業改善に取り組んでいる。

数学科の川久保晃一先生が、「なぜ、そうなるのか」と生徒たちが考えた

くなるような授業を実現する上で重視しているのが、教科書の内容を生かした生徒への問いかけだ。教科書は限られたページ数で作られているからこそ、「この条件はなぜ必要なのか」「こ



写真 『授業は間違ふ場だよ』と声をかけ、失敗を恐れずにグループ内で相談できる雰囲気をつくっている。



かわくぼ こういち  
同校に赴任して12年目。  
探究SSH企画部主任。数学科。

の条件がこう変わったらどうなるのか」といった、行間を読ませるような問いを創り出す絶好の素材であると川久保先生は考えた。

2次関数の決定について学ぶ授業で川久保先生は、1次関数などを振り返った上で、関数（グラフ）が特定の条件を満たす点の集合体であることを確認し、「頂点が点(2,5)であることだけが分かっている時、2次関数を決定することはできるか」という問いを生徒に投げかけた。教科書を読めば「分かった」つもりになりがちだが、本当に分かっているか、解けないような、教科書の問題とは少し異なる問いを投げかけるのは、生徒の中に「本当に自分は分かっているのか」といった疑問を生むためだ。

本記事の全編では、授業の詳しい流れとともに、「なぜ、そうなるのか」などと生徒が考えたくなる問いを「思考を深める問い」として、全教師が教科を超えて共有できるようにしている同校の取り組みについても紹介している。

本記事の全編には、下の2次元コードから  
アクセスしてください。



解説

授業づくりに影響を  
もたらす学習指導要領の  
次期改訂の論点

学習指導要領の次期改訂に向けて、文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会の教育課程企画特別部会が、教科の枠を超えた基本方針について議論を進めてきた。現行の学習指導要領では、これからの社会で求められる資質・能力の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が提起された。次期学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実装が改善の方向性の1つとして示されている。そして、同部会の議論における授業のあり方に影響をもたらす論点として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「学びに向かう力、人間性等」の再整理」「デジタル学習基盤を前提とした学びのあり方」「生きて働く『確かな知識』の習得」「障害や認知特性等、多様な実態を踏まえた調整」などが上がっている（\*）。

そこで本コーナーでは、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に寄与するべく、同部会の議論の論点に関連する授業改善に先進的に取り組む教師の授業実践を紹介する。目の前の生徒たちを、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手に育てるために、「学びをデザインする高度専門職」として創意工夫を重ねることが求められるこれからの教師のあり方を、誌面を通じて考えていきたい。

\* 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月）。総則・評価特別部会や各教科等ワーキンググループにおける議論を踏まえて一部更新。

## 「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

### Turning Point

活動の系統化を図り、  
ゴールを明確にした  
学びを実現

自己探究から進路実現へ。  
学年ごとにゴールを定め、  
生徒の「できる」を  
増やしていく

大阪府立箕面東高校

基礎学力の育成などに力を入れる

「大阪府・エンパワメントスクール」の大阪府立箕面東高校は、2025年度から、「産業社会と人間」と総合的な探究の時間で取り組む探究学習を、生徒が自己を探究する活動を軸とするカリキュラムに刷新した。以前は各授業の前後のつながりが希薄で、生徒の学びが深まらない状態だったため、新たなカリキュラムでは各学年のゴールを具体化するとともに、毎授業の活動を系統化し、スモールステップで調査・探究を積み重ねるプログラムにした。

例えば1年次は「自己探究」に取り組むこととし、年度末のゴールを「600字の自己PR文の作成」に設定。「キャリアナビ」(\*)のワークを活用し、自分の関心や得意なことを追究するなど、自己理解を深めながら、生徒それぞれに強みがあることに気づけるように各授業のプログラムを構成した。

生徒の学びを支えるのが、同校の進路指導のキャッチコピー「やるやん! みのひが」に基づく教師のポジティブな声かけだ。教師はどんなに小さいことでも生徒のできている点を褒め、生徒が成功体験を積み重ねられるようにすることを心がけている。

本記事の全編では、同校の探究学習の3年間の流れや大切にしている点、生徒への声かけにおける留意点など、実践の詳細を紹介している。



就職主担  
**札木 理**  
ふだき・おさむ



進路指導主事  
**吉田 拓郎**  
よしだ・たくろう

本記事の全編には、  
下の2次元コードからアクセスしてください。



### Turning Point

課題の  
設定方法の  
見直し

生徒の興味・関心を基にしたり、  
教師の専門性を生かしたりして  
課題を設定し、  
深く、楽しい探究学習を実現

福岡県・福岡市立福翔高校

福岡県・福岡市立福翔高校ではこれまで、2年次からの総合的な探究の時間においてSDGsに関連する課題を設定する探究学習に取り組んできたが、解決が容易ではない問題に直面し、戸惑う生徒がいたことを踏まえ、2025年度からは、探究学習で設定する課題はSDGsに関するものには限定せず、同校の教師が得意分野を生かして課題を設定す

るゼミ形式の「専門探究」、生徒がグループまたは個人で自由に課題を設定し、伴走役の教師と一緒に探究学習に取り組む「自由探究」の2本立てとした。

生徒が自分の興味・関心に基づいて課題を設定する探究学習に変えたことで、生徒の「もっと知りたい」「なぜこうなるのかを考えたい」といった意欲が高まった。以前であれば、生徒が教師に行う、探究学習に関する相談の多くは、「何をすればよいですか」といったものだったが、今では「どうしたら仮説が証明できますか」といった質のものに変わった。本記事の全編では、同校における探究学習の課題の設定方法の見直しのプロセスや、更新された探究学習に取り組む生徒と伴走する教師の様子、「専門探究」と「自由探究」のコース構成などについて紹介している。



1学年担任・  
25年度キャリア教育部  
**松本 弥生**  
まつもと・やよい



キャリア教育部主任  
**徳浦 望**  
とくむら・のぞみ



指導教諭・進路部主任  
**武林 哲朗**  
たけばやし・てつろう

本記事の全編には、  
下の2次元コードからアクセスしてください。



\* ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

## 「そうだったのか!」 教育課程

教育課程の  
柔軟化に向けて、先生方の  
疑問に答えます!

今号のテーマ

# 単位・単位制の仕組み

次期学習指導要領では、多様な子どもたちを包摂する教育課程を各校が編成できるようにするために、現行の仕組みが大幅に見直される見通しだ。そうした教育課程の柔軟化に向けて、現行の学習指導要領下での教育課程の編成に関して、先生方の疑問にQ&A方式で答える連載コーナーをウェブ連載記事として新たに設けた。

今号のテーマは「単位・単位制の仕組み」で、1つめの質問では「現行の学習指導要領下で高校の教育課程を編成する際に押さえておくべき基本事項」について取り上げた。まず押さえるべきなのは、高校では単位制が採用されている点だ。「単位」とは、各教科・科目等について必要となる学習時間を測る尺度であり、高校の学習指導要領では1単位を「1単位時間50分×35単位時間(コマ)」として計算することを標準としている。

また、各教科・科目の内容を無理なく指導できる単位数として「標準単位数」が示されている。高校の教育課程は、各教科・科目の標準単位数を基に、各校が自校の実態に応じて適切な単位数を配当し、卒業までに履修させる各教科・科目を編成するた

め、すべての高校は単位制だ。教育課程としては、学年による区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる単位制の課程と、学年による教育課程の区分を設ける、いわゆる学年制の課程がある。本記事の全編では、卒業要件における単位数や履修・修得の扱いなどについても解説している。

2つめの質問では「生徒の実態に応じて各教科・科目の単位数を変えたいと思った場合に、現行の学習指導要領でもできること」について取り上げた。端的に回答すると、学習指導要領に示された標準単位数を上回る単位数の配当(増単)は可能だが、下回る単位数の配当(減単)は実質的に難しい。具体的には、図の左側に示した「増単ができる場合の例示」のいずれかにあてはまれば、各校が必要に応じて増単可能だ。

一方、減単は原則できない。ただし履修教科・科目については、生徒の実態及び専門学科の特色等を考慮し、特に必要がある場合には、「数学」「英語」「ミニケー

### 図 増単・減単の条件

|         | 増単                                                                                           | 減単                                                                                                                                         |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 必修教科・科目 | 増単できる場合の例示<br>・基礎的な知識を十分身につけるため<br>・理解の難しい科目の内容を十分習得させるため<br>・特定の技術、技能等を反復、習熟させるための時間に充当する場合 | ●原則減単できない<br>生徒の実態及び専門学科の特色等を考慮し、特に必要がある場合のみ、減単が可能。また、その場合においても、標準単位数が2単位である場合は減単不可                                                        |
| 上記以外    |                                                                                              | ●原則減単できない<br>●以下のいずれかの場合のみ減単可能<br>・短い時数で該当教科・科目の目標の実現が可能であると判断される場合<br>・教科・科目の特質から一部の内容項目を取り上げることが可能である旨が規定されており、生徒の特性や学校の実態等にに応じてやむを得ない場合 |

※文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編」を基に編集部で作成。

ション」は2単位にすることができ、その他の必修教科・科目(標準単位数が2単位のものを除く)についても、その単位数の一部を減じることができる。総合的な

探究の時間についても、特に必要がある場合には、その単位数を2単位とすることができる。また、必修教科・科目以外の各教科・科目で減単ができるのは、図の右側の「減単」において示した2つの場合のみだ。なお、本記事の全編では、増単や減単がどのような場合に、どのように行えるのか、「数学」「英語」などの科目を例に具体的に示している。

本コーナーの末尾では、次期学習指導要領において単位制が大幅に柔軟化される見通しを示している。具体的には単位の計算方法の見直しとその1つで、1単位をこれまでの約半分にあたえる「17単位時間」とする新単位の導入が検討されている。また、減単は原則不可とすることを改め、生徒の実態及び教育課程全体を通じて資質・能力の育成に資すると認められる場合は、一定の限度の下で可能となる見通しだ。本記事の全編では、単位制の見直しによって教育課程の編成がどう変わるかを解説している。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。



監修



文部科学省 初等中等教育局  
主任視学官

田村 学 たむら・まなぶ



2026年4月よりVIEW next 編集部配属となりました森です。初めての取材で静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校を訪問しました。高校を卒業以来、久しぶりに触れる授業の空気に少し緊張しましたが、教室の窓から見えた雄大な富士山の景色に、一瞬で心が奪われました。この環境で学べる生徒の皆さんがうらやましくて仕方がありません。

この日拝見したのは、「自己調整学習」を取り入れた授業です（P.26 参照）。特に驚いたことは、生徒全員が主体的に学習に取り組んでいたことです。教える内容は同じでも、教師が用意する「仕かけ」次第で、生徒のワクワクや意欲がここまで引き出せるのだと、教育の奥深さを肌で感じました。

帰路に就く際、夕日に映える富士山を眺めながら、あの教室で見た生徒たちの真剣なまなざしを思い出し、胸が熱くなりました。（森）

VIEWnext

高校版 2026年10月号

10月20日発売  
(予定)

## Reader's VIEW

先生方からのご意見を  
紹介します

2026年4月号へのご意見

## 新たな提案ができるイノベティブな教師に

4月号の特集のCASE 1 北海道・市立札幌藻岩高校の記事で、「大切なビジョンを共有し、実現のために何をするかは任せてくれる」という對馬光輝先生の言葉に共感した。生徒と直接かかわる機会が少ない校長が現場の細かい事柄に口を出すと、うまくいかないことがある。ただ、現場から具体案もなく、相談されれば、校長は何かしら答えざるを得ない。教師は校長のビジョンを基にクリエイティブに発想し、新たな提案ができるイノベティブな存在になるべきだと思った。山形県立米沢東高校 高橋英路

## 前向きに捉えた点を管理職に直接伝えたい

4月号の特集（CASE 1～3）を読み、管理職の言動がいかに学校文化をつくるかを実感した。現場の営みを前向きに捉えて直接伝え、さらに外部へも発信していく。手厚すぎるようにも思えるその姿勢は、学校運営や学級運営の素晴らしい模範になると感じる。一教員の立場からも「今のアプローチは嬉しかった」といった具体的なフィードバックを管理職に率直に伝えていきたい。正解のない変化の激しい時代だからこそ、そうした双方向のやり取りが学校の安心感や安定感となり、組織全体が柔軟に試行錯誤できる土壌をつくるのだと改めて気づかされた。

神奈川県・横浜市立金沢高校 斎藤真彦

## ビジョンに基づいて語り続ける必要性を実感

4月号の特集のタイトルである「なぜ、あの学校は人が動くのか？」について、「研究者の視点」の記事で帝京大学の町支大祐准教授が指摘した通り、教師が試行錯誤を繰り返しながら、自らの言葉でビジョンを語り、組織全体で取り組むことが重要だと思う。CASE 1～3の各校の共通点は、リーダーが結束し、何事もビジョンに基づいて現場の教師に語り続けていることだった。それは決して簡単なことではなく、途中で疑問や不安を抱えて立ち止まってしまうかもしれない。長期的な取り組みになることを覚悟して続ける必要があるだろう。東京都・私立岩倉高校 松本祐也

## 社会の変化を敏感にキャッチし、指導を更新していく

4月号の「指導変革の軌跡」の記事を読み、およそ10年周期で東日本大震災やコロナ禍といった社会を揺るがす出来事が起こり、その影響を受けて、人々の学校教育への価値観や関心が大きく変化してきた軌跡を実感した。これからの社会を予測することは困難だが、だからこそ学校現場には、社会の変化を敏感にキャッチし、変革を恐れない姿勢が不可欠だ。どのような社会が到来しても主体的に生き抜いていくための資質・能力を生徒が身につけられるよう、カリキュラムや日々の指導を更新していきたい。

静岡県・私立静岡サレジオ高校 神谷隼基

## 探究学習では生徒の課題設定が重要

4月号の「『やらされ探究』から『マイ探究』へ!」の福井県立坂井高校のウェブ連載記事を読み、探究学習では生徒が自分にとって重要だと思うことを課題に設定すべきだと改めて感じた。「興味のあることがない」「部活動で忙しい」といった生徒もいる中で、生徒が社会にかかわる機会を持てるように声をかけるとともに、活動の前と後で自身の変化を振り返ることができるようにしていきたい。

北海道 匿名希望

VIEWnext 高校版 2026年7月号 特集テーマ連動オンラインセミナー

# 「どう進める？ 高校の特色化・魅力化」 開催のご案内

各号の発刊後に、特集のテーマについて  
さらに理解を深める！

本誌発刊

本誌の特集の  
テーマと連動した  
オンラインセミナー

今年度は各号の発刊後に、特集のテーマと連動したオンラインセミナーを実施しています。2回目となる今回は、7月号の特集のテーマである「どう進める？ 高校の特色化・魅力化」と連動し、高校の特色化・魅力化を進める上で管理職に求められる視点や役割について深めます。管理職を始めとするリーダーのお立場の先生はもちろん、将来の学校を担われる若手の先生も含め、多くの先生方のご参加をお待ちしております。

登壇予定者

佐藤 到<sup>いたる</sup>先生

全国普通科高等学校長会 事務局長

神奈川県立松陽高校、同・横浜翠嵐高校で校長を務めた後、神奈川県立総合教育センター顧問、横浜国立大学教職大学院連携教授を歴任。22年度から現職。全国の普通科高校を訪れ、改革支援を行う。

舟越 裕<sup>ひろし</sup>先生

長崎県立佐世保南高校 校長

長崎県立佐世保北高校で進路指導主事として同校の進路指導をけん引。同・佐世保西高校で教頭、同・松浦高校で校長を務め、25年度から現職。松浦高校や現任校で普通科改革の取り組みを先導してきた。

開催日時 2026年10月9日(金) 16:00～17:00

形式 オンライン(ZOOM 配信) 参加費 無料

プログラム(予定)

[プログラム1] 特集解説

本誌7月号・特集「どう進める？ 高校の特色化・魅力化  
——生徒を主語にした学校づくりに向けて」のポイント解説

[プログラム2] 質問への回答

読者から寄せられた質問に対して、現場の実情・実践に詳しい  
佐藤事務局長と舟越校長、編集部が回答  
ご質問は、お申し込みフォームで受けつけています。

## 参加申し込み方法

右記の2次元コード、  
または下記URLから  
お申し込みください。


<https://benesse-hs.jp/VIEW2621>

参加申し込み締め切り日

2026年10月7日(水)

※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。 ※登壇者の都合等により、配信内に録画再生を含む場合があります。  
※一部時間帯の視聴も可能です。※プログラムの内容は変更になる可能性があります。あらかじめご了承ください。

## オンラインセミナーの最新情報を受け取りたい先生はご登録を！

VIEWnext 公式アカウント

LINE@

友だち募集中！

『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、オンラインセミナーの最新情報はもちろん、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当コンテンツに、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひご登録をお願いします！

友だち登録の  
方法例

方法① 右の2次元コードを読み取る

方法② LINEアプリの「友だち追加」&gt;「ID検索」で「@view21」と入力して追加

お問い合わせは >> <https://benesse-hs.jp/nm2gq>  
こちら

お急ぎの場合は、お電話もご利用いただけます。

株式会社ベネッセコーポレーション お客様サービスセンター TEL:0120-350455 (通話料無料)

受付時間：月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、夏季休業、年末・年始を除く)

8/11(火)～8/16(日)はお客様サービスセンターは夏季休業です。



## 生徒と創る学びの情景

## 多様な学び舎で、理解と共感を

北海道静内農業高校 廣谷 玲先生



農作物の生産や乳牛の飼育管理、そして日本唯一の軽種馬生産など、多様な学びを展開する静内農業高校には道内外から生徒が集まる。異なる背景を持つ生徒たちに家庭科担当の廣谷先生は「理解と共感を大切にしよう」と伝えている。「授業において生徒が自分の家庭の考え方を話す場面が少なからずありますが、それぞれ違うのは当然で、正解はありません。自分とは異なる意見も1つの考え方として受け入れ、共感する。その大切さと難しさを学んでほしいのです」と語る。

先生自身、進路指導部長として、理解と共感を胸に生徒と向き合う。全校生徒の進路希望調査に目を通した上で生徒に頻繁に声をかけ、その会話から内面をくみ取り、生徒の可能性を広げる選択肢を調べて生徒や担任に情報を届ける。『これでいいや』ではなく、『これがやりたい』と納得して選ぶ。それが卒業後も自分の足で歩いていける確かな自信になります」と廣谷先生。農業を志す生徒は『『スマート農業も面白そう』と漏らしたら、先生が新設の学科を教えてくださいました。その学科を調べるうちに、学びたい学問や将来像が一層明確になり、志望学科を決めることができました』と語る。先生の理解と共感も力にして、生徒は前に進んでいく。

ひろたに・れい 同校に赴任して6年目。進路指導部長。家庭科。

北海道静内農業高校 1978(昭和53)年設立/全日制/食品科学科、生産科学科/共学/1学年約50人/2025年度卒業生進路実績 国公立大は、帯広畜産大に2人が合格。私立大は、北翔大、酪農学園大、東京農業大、京都産業大などに延べ11人が合格。短大・専門学校進学7人。就職22人。

「VIEWnext」高校版に関するお問い合わせは

お客様サービスセンター

右記の2次元コード、または下記URLから  
お問い合わせフォームにアクセスいただき、お問い合わせください。

<https://benesse-hs.jp/nm2gq>

